

---

# 白銀の女神にごちゅうい！

ひよこだよ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

白銀の女神にごちゅうい！

### 【Zコード】

Z8798P

### 【作者名】

ひよこだよ

### 【あらすじ】

電車事故で死んだ主人公は、神様の好みという事でH×Hの世界へ転生することに。主人公は幻影旅団と共に、好きな事をして樂します。神様にもらった能力『ヴァルキリー』のおかげで敵なしです。ヴァルキリーを知らない人でも、分かるように書いてます。自由気ままに過ごす主人公にごちゅうい！

## 第1話 はじまり（前書き）

いつも、はじめまして。  
初めての作品です。読みにくいかと思いますが、よろしくお願いします。

# 第1話 はじまり

今日は一コースのお姉さんが言った通りになり、窓の外には雪がたくさん降っている。

線路に雪がたくさん積つてゐるけど、大丈夫かな？

向いたその時……

「何?...ちよちよちよちよつと...」のわ――

変な音が聞こえると、電車が左右に揺れ始め、あつという間に横転。吊革につかまつてられなくて身体が浮いたなって感じて…

最後に見たのは、田の前に座つてた横綱級のおじさんが私の上に落ちてくるところでした…

気が付いたら白い空間にいました。

ん？んんん！？おつかしいな・・・たしか私つて電車に乗つてたば  
す・・・

そもそもつて電車がいきなり揺れて、上から落ちてきた横綱にブチ

「そのとおり！あなたはブチッと潰れちゃいました～～

「アカウント登録されたのナ・ヘ。」

「あれちらの風」――

何!?なんか変なのが出てきた——髪の毛も服も田も真っ白!!!!

セ——ツ変態セ——セ——

「ちよつちよつ誰が変態やねん！－！」

「だから変態違うって。それに犬でもないで！」

・・・あれ?・・・声に出しちゃんのこなん代へ。おそれか思つたこと

「そのとおり！ ばれてるで、なんてつたって僕は神様ですから！  
！ あなたは僕に選ばれたラッキー人です。というか僕好みです！  
なのでやりたい事ありますか？ なんでも願いを叶えてあげましょ  
う

・・・黄色い救急車よんであげなあかん人か・・・

「ちがーーう！本当の僕は神様なの！…もう普通に話してよね！」

「本当に神様でなんでもありなん?生き返れる?」「費した死体こなう帰れる女」

・・・それはないわ・・・それやつたら・・・

「H×Hの世界に転生とかでも？」

「んじゃ、ヴァルキリー・プロファイルに出てくの全部つていける  
よか?」裕しい能力とかも「叶えるよ」

?

「もちろん、容姿は今ままでいいよね！」

「ん、念は特質系で、体力・知力は完璧で！！」

「まっかせなさい。それじゃいくよ～～。」

うわあーすごい。身体が透けてく。それにしても神様の好みでよかつた～～これで念願のヒソカやクロロに会えるかも！楽しみや！神様ありがとう～～

頑張つて。僕にできるのはこれくらいだけど、いつも見てるからね。あと少し。はやくこっちに帰つておいで・・・愛しい・・愛しい・・僕たちの女神さま・・・

## 第1話 はじまり（後書き）

原作前に転生する予定です。  
ヒソカ・クロロが大好きなので、キャラを出来るだけ壊さず、出し  
たいと思います。

## 第2話 神様つてすうじ（前書き）

小説つて難しい——！  
読みにくくてじめんや——！

## 第2話 神様つてす！」

「おんぎや～～ああ～～」

転生つて赤ちゃんからか～。うーん、目が開かないし、動けないーー。お父さんとお母さんつてどんな人かな？

「何だこの髪の色は！？お前、どうこうことだ！」

「そんなの知らないわよ！？」

「落ちつくんじや、一人とも…」

なんかいや～な予感が…なんとか目を開けて見てみると、ダンディーな男性とお婆さんが美人な女性と言い合ってるけど、髪の色変なのかな？容姿はそのままつて神様が言つてたから、黒髪のはずなんだけど…レオリオも黒髪だからへんじやないはず…わかった！！ダンディーな人が父親で、美人な人が母親なら一人とも金髪だから可笑しいんだ！！あちゃ～神様どうすんのさ。あつ目があつた！

「つづつ、目が銀色！？」

「どうして！？私、何も悪いことしてないわ！！」

「なんということじや…クルタ族にこのよつな子が生まれよつとは…不吉じやー！」

不吉つてなにさーちよぢょぢょと何するの？

白い布に包まれて、お婆さんの手から父親へ渡される。父親は無言で家の外へ歩きはじめる。

「あなた、どうするの…？」

「…族長に見せてどうするのか、決めてくる」

「わしも行こう…」

今から族長さんに会いに行くんだ。どうなるのかな・・・

族長の屋敷につきました。さつきから難しい顔して話し合つてます。

あつ、  
父親が来ました。

一すまんな

あ、いやな予感がするよ。また抱えられて移動中・・・  
族長さん達にお婆さんも一緒に森の中を黙々と歩いてます。」

方舟記

親から手を離されちゃいました。

卷之二

ん  
・  
・  
・  
・  
・  
大丈夫だよ・  
苦しくないよ・  
田をあけて『」ら

本當だ、苦しくない。それにまわりが輝いてるー。」わいわいやう。

「なんという」とだ・・・泉が輝いている・・・」

赤ん坊が沈みはじめてすぐのことだ。おれの目の前で、泉が銀色に輝き徐々に凍り始めた。さらに中央に光が集まり膨らんでいく。輝きがおさまると、大きな結晶が出来上がり中にあの子がいた。あの子はもしかして、不吉なものではないのかもしれない。

「族長、あの子は本当に不吉なのでしょうか？」

「わからん、しばらくこには様子を見る」としそう・・・・・クルタ  
にとつて良ければいいが」

何ということだ、こんなことは初めてじゃ。近寄ることが出来ぬ  
以上しかたあるまい。

少數の監視の下、様子を見る』ことに決まった。

その時、結晶の中の空間では再会してテンションの高くなつた私  
と神様がいました。

「うおーー神様すごいじゃん！」

「そりでしょー僕ってすごいんだーー！」

溺れることが無くて良かつたけど、赤ちゃんの体じゃ何もできな  
いじゃ・・・

「まつかせなさい。それ」

「にゃーーーおつきくなつた！」

「これで大丈夫でしょ？僕はもうこれで助けてあげられないんだ・・  
・頑張つてね。ここから出たい時はこの扉から出られるからね」  
すると何もないところに茶色い扉が出来き、『出口』と看板がかか  
つていて。

「ありがとう神様。頑張るから！」

「ここで能力の練習をすることをお勧めするよ。今は原作の10年  
前だから~じやね！」

神様はあつという間に消えていった・・・・頑張るぞーーまずは、  
能力の確認だね。えーっと・・・うわっ本が出てきた。これって攻  
略本？なになに、おおっステータスが出た！－アイテム・武器・防  
具・アーティファクトまで全部ある！マテリアライズホイントが使  
つても減らないしーー神様最高ありがとう！ーー

これで安心してヒソカやクロロに会える。どうやら私って目の色は銀色に変わったけど、容姿は変わってないみたい。23歳のレンヌと同じスタイルだし、ステータスをみると神族になってる・・・死なないってことか。クルタ族に生まれてびっくりしたけど、ここで待つてたらクロロには必ず会えるよね。

それにしても、この空間なら神様のおかげで23歳の姿でいられるけど、外に出たら元に戻るのなんとかしないと・・・頑張るぞ！

## 第2話 神様つてす！（後書き）

書いててわかる、かなりひどいやんな。  
「めんやでーー文才がほいいよ～～

### 第3話 幻影旅団あらわる（前書き）

ヴァルキリー知らない人には分からぬかも・・・  
何となく感じてください。

### 第3話 幻影旅団あらわる

空間の中で、アイテムとかの特殊変換してたらあつという間に5年がたちました。もつそろそろ来てもおかしくないんだけどな・・・

ドゴン！－ドゴン！－ドガソード！－ドッカーナン！－！

すゞい音・・・集落の方からだ。幻影旅団のお出ましかな？おお～監視役の2人つて走るの速かつたんだ。もう見えないや。さあ、そろそろ出る準備でもしようかな。ここから出ると元の年齢に戻るけど、もう5歳児だから大丈夫！それに、念能力使つたら大丈夫だし。

修行でだいたい分かつたことは、こんな感じになりました

#### ＜念能力＞

攻略本『ヴァルキリー』を出してステータスから装備・アイテムが使える。全キャラの能力も使えるが、一人ずつしか無理。キャラの変更をする時は必ず攻略本を出すこと。設定後は攻略本をなおしても能力は続き、元に戻るときは設定しなおす必要がある。

#### ＜キャラ能力＞

レナスの能力を設定した場合、身体がレナスに変身。顔は自分のままでした。レザードに設定したら身体が男になつてました！－でも顔はそのまま・・・めちゃ優男やんか。

#### ＜アイテム＞

具現化して出てくる。出しつぱなしにしようと、1日で消えてなくなつたけど手に持つてると、大丈夫でした。具現化したアイテムが他の人に使えるかどうかは、実験してみないと分かんないです。

なかなか楽しかった！能力使つたらキャラの年齢になれるのが嬉しいけど、性別まで変わるのはビックリ！！みんな身体が引き締まつてて良いね♪でも、アリューゼは無いわ・・自分の身体がマッチヨつて寒気がしたわ・・

ザツザツザ・・・ガサガサツ！！！

誰か来た・・・あれって父親じゃん、血だらけやけど。

「お前だけでつつづヴァアアア！？」

首が飛んだ――！ビックリしたけど意外と平気かも。転生したから？って考えてたら誰か來たよ。あの入つてたしいか・・・マチだ！

「これで最後・・・・・・？」

めっちゃ見られてる。そりゃ不思議だよね・・・泉が凍つてるし、結晶が浮いてるし。そろそろ出た方がいい感じかなつて皆來た！！

「・・・・・どうした・・・」

「おいおい、なんだよコレ」

「うん、すごいね」

「ほう、凍つてるね～」

「・・・確かに凍つてるね」

幻影旅団が集まつた、出るなら今！

出口の扉から外に出ると、扉の向こうは光があふれていた。目をつむり我慢をしていると・・・凍つた泉が銀色に輝やき、結晶が華の蕾に変わり開花した。気がつくと私は、華の上にシンプルなワンピースを着て立つていた。身体をみると5歳児。ちっちゃいわね～でもかわいい さあ、皆に挨拶をしに行こう～

今日はクルタ族の『緋の眼』が目的だ。クルタ族は興奮すると眼の色が変わる。あの緋色はとても奇麗だ。それにシャルの情報によるとクルタ族は何かを隠しているらしい・・・少し楽しみだ。

「緋色になっている眼は一つ残らず回収しろ・・・」

一人森の中に逃げたな・・・

「団長、私が行ってくる」

「わかった」

周囲を確認するともう全て回収できたようだ。あとはマチが追いかけて行つた一人だけだ。

「行くぞ、あと一人回収したら戻る」

様子がおかしいな・・・なんだこの凍った泉は。すごいオーラの量だな。これが隠していたものか。あれは子ども?近づいてくる。まずは様子を見るか・・・

### 第3話 幻影旅団あらわる（後編）

感想ありがとうございます。

コツコツ頑張ります～

## 第4話 ホームにつきました（前書き）

やつと主人公の名前が決まりました。

## 第4話 ホームにつきました

気合を入れて、笑顔で挨拶いきます。

「こんばんわーー！」

「・・・・・・・・・・・・

無反応！？怖いってばもう・・・はあ、とりあえず父親と他の人たちの確認しこかな。マチなら会話してくれそうだし。「どうしてあの殺したの？」

「・・・あんた何」

「あの人子どもかな？」

「なんで疑問系なのさ」

「話したことないし、すぐにここに捨てられたり」

「・・・・団長どうする？」

見てる見てる、クロロなに考えてんだか分らんわ。

「・・・お前、なぜ凍つてた？クルタ族なのか？」

なんでって、神様に助けてもらいました って言つたらダメだし。神様のことだけ言わなかつたら大丈夫かな・・・後は知らないでとうすしかね。

「私はクルタ族だけど、色がみんなと違うから不吉なんだって。だからここに捨てられたの。凍つてたのは、死にたくないから・・・

晶石が出せるの」

「そうか・・・

「クルタ族なら殺すか？」

「やめる、ノブナガ」

「・・・出してみ」

「いいよ・・・あの木でいいよね。ヒイッ！ヒイッ！ヤッ！…」

右腕を田の前の木に向かって3回振り下ろして、木に晶石を擊つと木が一瞬で凍りついた。成功！うまくいって良かつた、ちょっと自信が無かつたからホッとした

「これでいい？・・・」

「ああ。」

また考えてる。あつ、『緋の眼』だ。気持ちわるーーーっ！確かに奇麗だけど、田ん玉を鑑賞つて何がいいのかわけわからん。

「・・・クルタ族は俺たち？旅団『クモ』？が殺した。お前はどうする？」

「クルタ族のことは別にどうでもいい・・・・・行くとこない」

「決まりだ、連れていぐ」

「まじかよ、団長」

「決まりだ」

おいおいおい、あんな子どもを連れていくのかよ。はあ、しうがねえな・・・・団長も決めたら変えねーしよ。ああーーーっ、団長に抱っこせがんでんぞ、あいつ！・・・団長も抱っこするんかい！？・・・もう何でもいいや・・・

ノブナガがブツブツ言つてるけど、無事に付いてくことに成功それにしてもクロロつて露出狂？腹筋が見えてるよ！ムフフvv子どもの身体で良かつた～今は、スキンシップを楽しも～～っと

・・・移動中・・・

ホームに到着！流星街でした。只今、打ち上げ中です。みんな飲

んでます。ウヴォーとノブナガが煩いです。パクノダさんがジュー  
スくれました、優しい！！それにしても、子どもの身体だったら眠た  
くなつてきたよ・・・ってシャルナーグが来た。

「ねえねえ、君つていいくつ？名前は？」

「5歳・・・名前ない」

「名前ないんだ！？」後で考えなよ

「・・・うん」

「んじゅや、畳石つてどうせつて出しているの？」

「・・・ハイツて」

「他にも何かできる？」

「出来るよ！」

「おおー、見せて見せて」

「うん、いいよ！」

ええ～っと、『ガアルキリー』を出すだけでいいかな？ポンつと  
出してシャルに見せると、めちゃ驚いてるーつてみんなこっち見て  
んじゅん！？

「へ～、団長！この子やっぱ念能力使えてるね」

「ああ・・・念については明日聞く。それより、プラチナは寝に行  
くぞ。付いてこい」

ええ！？もつちゅうと興味もつてよーーでも、寝に行くぞつて一  
緒に寝るのー？

「プラチナつて君の名前、決まったみたいだね。良かつたじゅん！  
ほら、付いて行きな」

「うん、ばいばい！」

トテトテトテトテ・・・・・・

「か～わいい 明日が楽しみだね。僕も一緒に聞いといつと

面白そだだから、みんなにも声をかけようかな？」

## 第4話 ホームにつきました（後書き）

H×Hの漫画を読みなおしています。  
みんなの口調が意外と難しいです・・・

## 第5話 念能力をみせてみる（前書き）

標準語が分からなくなつてきました・・・  
といひどいひ、関西弁でなまつてますが許してください。

## 第5話 念能力をみせてみる

「ヤーン。ネコ拾いました。

昨日、クロロの後をついて行つてゐる途中に黒猫を発見。近よつても逃げなかつたので抱っこしてみたら懐いてくれました。かわいいよ。

クロロと一緒に寝れるのかと思つたら、お隣の部屋でした・・・

黒猫と寝たから寂しくなかつたからいゝけどね。名前どうりかな?

朝になりました。

大きな部屋に行くと、旅団みんながいました。私の念能力を見に來たみたい。神様にもらつた能力で驚かしてやる!

「何したらいいの? 団長さん」

「プラチナは旅団ではない。俺はクロロ=ルシルフル、好きに呼べばいい。他の奴は自分で聞け」

「わかった。クーちゃん」

「・・・・・クロロにしてくれ」

「んじや、この仔をクーちゃんにする。クーちゃん、もふもふー」「にゃーーん!」

この時、クロロとプラチナの会話を聞いて団員の思いは一致。(はあーー、なんだろこの子。団長相手にマイペースすぎじゃん。・・)

何かみんながため息ついてる。それにしても、クーちゃんかわいいから、どうでもいいや

「プラチナ、本を出してみてくれ」

ポンッ！「出したよ」

「・・・（具現化系か？）それで何ができるか、やってみてくれ」「了解！」

ノリで敬礼してみました！クロロが『スキルマスター』出しているけど、私のは神様からもらった特別な能力だから『ピー』できないし。張り切つていつてみよう！

まずは、ジエラード（14歳・魔術師）に変身。続いて、杖くルビー・メイスへを出してみる。最後にローブく聖衣ブリタニア・ガーブへを着たら完成。

「いきます！・・・バーン・ストーム！」

ドッカ――――ン――！――

「・・・・・・（じつこいつことだ？）」

「もうちょっと強くできるけど、やる？」

「ああ、やつてみろ」

んじや本を出して、10倍の攻撃力がある杖くノーブル・ディザイアへに変更したら本は直して、

「次は、10倍アップでいきます！・・・バーン・ストーム！――」杖を勢いよく振り下ろしたその瞬間。

ドドドドツツツツガガガアアアア――――ンンン――――！――

・・・やりすぎました、床と天井に穴があいたよ。攻撃力1200でこの威力なら、攻撃力20000く聖杖ミリオン・テラーへはどうなんの！？大魔法のイフリートキャラレスなんかどうなるん！？

「や、やりすぎ? (笑つて) まかすべしー。」

「……………プラチナ。すごい能力ではあるが、加減を覚えろ」

「はい」

「他に出来ることは?」

「力がないのが出来るよ!」

「元々」、  
・・・・の上位へ=〔上位へ〕  
・・

卷之三

クロロが『スキルマスター』をなおしたつていさせ、やつぱつ口  
ペーするのあきらめたね。

ぐちぐち言いながらノブナガが前に出てきたから、本を出して設定を、洶（21歳・侍）に変身。倭刀＜靈劍・草薙＞、鎧＜鏡鎧リフレックス＞に変更。これで絶対大丈夫！！ノブナガで遊んでやる。

男になれるのか！？・・・何でもありじゃねー！」

一ノブちせんしょうふだ！てせーーーー

今昔物語

先手必勝！！孤影斬で後ろに回り込み、双円舞を叩き込もうとしたら横へ避けられ脚が頭を狙つてきた。後ろにのけぞつてかわし、脇腹に閃光斬を入れて打ち上げ、続けざまに必殺技へ。

「アーティストの心」

完全に捕えたと思ったのに！？襲ってきた一撃を胸の前で受け止

くなかつたけど、やりすぎじゃない！？

ガラガラ壁から出て、みんなを見ると何か驚いてた。

「ノブちゃん！手加減してくれてもいいじゃない！？」

「・・・お前な、一応男になつてるとせにやのしゃべり方やめんな  
いやでーす！」

ノブナガと言ひ合ひてゐとクロロが近づいて来ました。

「・・・傷一つないな。一撃の威力も問題ない。だが、せっかくの  
技も決まらなければ意味がない。経験が足りないと、武器に頼り  
すぎだ」

「そうだな、最後のは決まつてたら危なかつた。経験積めばなんと  
かなるだろう」

「決まりだ。明日から模擬戦を中心に修行だ」

「・・・はい」

本を出して設定を元に戻して、今日はこれでおしまいだつて。パ  
クノダとマチが作つてくれたご飯を食べて、クーちゃんと本を読む  
クロロの横でお昼寝タイム。疲れた・・・

明日からは、旅団のみんなが修行を手伝ってくれることになりま  
した。

## 第5話 念能力をみせてみる（後書き）

次は修行です。旅団でのマスコット的地位を主人公は目指しています。

もうすぐ、ヒソカを出そつかと思つてます。

## 第6話 修行とヒンカの登場（前書き）

ヒンカをやつと出せました。

## 第6話 修行とヒソカの登場

修行をはじめて1年がたち、神様が体力・知力を完璧にしてくれたおかげで、スムーズに強くなりました。戦い方は、旅団のみんなの動きを見ただけで、すぐに対応するようになりました。

最近は、皆が私の出鱈目に呆れて修行もするけど、鬼ごっこをしたり遊んだりします。負けたら1つ言つことを聞くルールだから、けつこう必死に遊んでます。この前は勝つて、フランクリンに肩車してもらって、背がすごい高いから眺めがよくってたのしかった。今日は、フェイタンが遊んでくれる予定だけど何をするのかな、フェイタンって怖いんだよね。

来た来た、フェイタンが来てくれました。

アテチナ準備はいいね

「はい、今日何をするの？」

「ワタシが石を投げるね。全部よけるね。」

一  
いつでもいいよ！

「じゃあ、いくね・・・・つー・・・」

卷之三

ン!  
!

「なんのこゝれしきーはつ・・・よつ・・・ヒハ・・・ほつーー。」  
「次は速くするね」

ルコツ・・・ルコツ・・・シコツ・・・・・・シコシコシコシコ  
シコツツツツツツ

「せう」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「変な声やめるわ、これでもいいひねりひ」

ヒコッヒコッヒコッヒコッヒコッヒコッヒコッヒコッヒ  
ツツツ……！

「右、右、上、上、下、下、左、右斜め後ろ45。ま～ちょいとち  
よ～いと～～～（ｐｙ太公望スース（笑）」

「・・・何かムカつくね！～」

キーンッキーンッキーンッキーンッキーンッキイキン  
！！！

「フヨイタン！？ナイフになつてゐるかー？わーーー『じめんなさい  
いいいい…ぎやつ！？』

「・・・ふん、おやつはワタシが食べるね

「はい、『じめんなさいでした・・・』

これからは絶対、フヨイタンで遊ぶのはやめよう。

おやつはフヨイタンに負けてなくなつたから、クロロんといで繪  
本を読んで、クーちゃんをお昼寝しようつと。

パクノダとマチの「」飯がおいしくって幸せです。修行を頑張つて  
勝てたら、リクエストしたのを作つてくれます。昨日は「オムライ  
ス」を作つてもらいました。隣のイスでクロロも一緒に食べてるだ  
けど、意外と似合つてます。違和感ないのよね。今日は勝負に負け  
たからリクエストできなくつて、ハンバーグ食べられなかつたです。  
・・残念。

明日の修行？遊び？の相手はノブちゃんです。この前は、どっち  
が大きく？円？が出来るか勝負して楽勝だつたけど、明日は何の勝

負をするのかな。明日に備えて今日はもつ寝よつひとつ。クーちゃん  
いくよ。

はい、次の日の朝になりました。

朝ごはんも食べて、準備OK！

修行をする部屋でノブナガを待つてます。おっそいな～寝坊？  
「やあ？ なにをしているんだい？」

「！！・・・（ビックリした！！）」

出た出た出た―――――、ヒソカ登場じやん！！初対面だか  
ら知らんぷりしないとね。

「・・・だれ？」

「ボクは、ヒソカっていうんだよ？ 君の名前は？」「  
プラチナっていうんだ。ヒソカは何しに来たの」

「ボクは旅団『クモ』の4番になつたんだ？」

隣に座つたと思つたらジワジワ近寄つてくるんですけど・・・嬉しいけど近い近い近いつてば！！誰かヘルプミーーーッ、あつノブナガがめっちゃ走つてきた。ノブちゃん！ 何とかして～。  
「ヒソカーーーー、プラチナから離れろってんだ！」

ヒソカがノブナガに気を取られた瞬間に、ノブナガの後ろに隠れるのに成功。嬉しいんだけど、いきなりは心の準備がね。

「残念？ 君面白いね？」

「さつさと行け！！」

「怖い怖い？ またね」

「・・・バイバイ」

やつぱりヒソカって変態チックやね。服装とかしゃべり方とか。

「おい、プラチナいいか。あの変態。口には氣をつけるよ？ まあ、お前なら襲われても返り討ちにできるから大丈夫だとは思つけど、本当に気をつけろよ？」

「うん、わかった」

ノブナガつて心配性？過保護？似合わないな？」

「今日は何の勝負をするの？」

「試合だ、参ったって言った方が負けだ」

「んじゃ、「インが落ちたらスタートね！」

「おひー！」

結果は、私の勝ち——ボロボロになつたけどね。けつこう能力使わなくても大丈夫になつてきました。まあ、ノブナガつて優しいから手を抜かれている気がしないでもないけどね。それに能力フルに使つたら瞬殺できるし。

今日こそ、パクノダとマチに「ハンバーグ」作つてもらおつと

## 第6話 修行とヒンカの登場（後書き）

次は、旅団のお仕事についていきます。

## 第7話 お仕事参観日（前書き）

読んでくれて、ありがとうございますー。

## 第7話 お仕事参観日

ヒソカが皆に嫌われぎみです。変態だから？変態だからだよね。だつて成人男性が語尾に？とかピエロの格好とか普通しないもんね。皆が皆、ヒソカには気をつけるつていうけど意外と話すと楽しいよ？クッキーとかケーキとかキャラメルとかアメとかチョコとかくれるし。

旅団の皆さんよりコメント

（え？、いつの間にか餌付けされてたの！？） プラチナつつ大丈夫か！？

バラバラバラ～～、ヒソカのトランプタワーが崩れました。

「やつたー。ヒソカの負け！今日は何くれるの？」

ヒソカに向かつて手を出すと、ほほえましい顔で見られちゃいました。笑顔もいいけど何かちょっとだいってばもう。拗ねて晶石撃つぞ口う。

「残念？」「んそれじゃコレをあげるよ？」

「トランプ？ヒソカがいつも使ってるやつだよね、いいの？」

「ボクは新しいのを買つたからね？」

「それじゃ、ありがとう」

「どういたしまして？もう一回どう？」

「タワーより、この前したトランプと晶石の撃ち合いがしたい！」

「いいよ、リベンジだね？」

遊んでたトランプを片付けて、ヒソカから10mほど離れて立て深呼吸。前回は50枚中3枚、撃ち損じたから今日こそは全部落ち落としてやる。

「はじめは50枚、出来たら100枚いくよ？」

「・・・お願いします」

シロツ・・キヤンシ・・・シロツシロツシロツシロツシ・・・キキ  
キキキイイイソソーーー

「おお、じへんれじゅあ、100枚こくわん。」

「うん、完璧だね？」

今田はクリーメーション＝火葬場といふと  
われじや

「井戸」

「またね？」

パクノダとマチが部屋にいない・・・リクエストできない。早く言わないと作ってもらえないのに。

「せんじ」

「なあにクーちゃん。ふんふん、皆集まってるんだ。ありがとう~

}

クーちゃんはなんと？念？で文字が出せるスーパー猫になつたのです。理由は簡単。『ヴァアルキリー』で具現化したアイテムが自分以外に使えるかどうか、回復アイテムの？エリクサー？を出してボーッと考えてたら、クーちゃんが飲んじゃいました。その日は何もなかつたんだけど、次の日、本を読んでだクロロがクーちゃんを抱っこして？念？が使えているのに気が付きました。驚いたけど文字でお話ができるようになつて良かつた

アイテムの実験はクロロでしました。感想は「元気になつた、効いてるな」だつて。冷静な奴め。

「 いるな」 だつて。冷静な奴め。

そろそろ皆がいる部屋に到着です・・・あれ?珍しく旅団が全員集合してるよ。

「ちようどいいところに来た。今田の仕事にはブレチナも一緒に付いてこい。そもそも仕事の雰囲気を知つてもいいだろ？」

「……咲良おとこなら怒るね」　　b yフ H イタン

「お前なら大丈夫だろ」 byノブナガ

「？」 by ヒソカ

「プラチナはオレと一緒にだ。雰囲気がつかめればそれでいい、行く

「そ

卷之三

ターゲットの大きな屋敷が見えるポイントに着きました。シャル

ナーグが警備隊の情報を話しています。

「警備に雇つてるのは60人ほどだよ。うち5人が念能力者だね、今日も楽勝だ」

## 「念能力者が何処にいる?」

「それで講義が無い」

念能力者が何処にいるか知りたいんだよね。『ヴァルキリー』を出して設定変更、ソナス（23歳・アリス神族）ご変身、アイティム

? 天空の瞳? と? エネミー・サーチ? を具現化。

「プラチナ、何をしている？」

「もうちょっと待つて、念能力者の位置がわかると思つから」

? 天空の瞳？で屋敷の地図を出して、レナス専用アイテム？エネミー・サーチ？で敵の位置を特定。さらに念能力者の位置を特定。攻略本をクロロに見せると、頭を撫でてくれました。

「便利だな・・・これからは敵の位置把握を任せる

「はい」

「念能力者は入口に2人、奥の隠し部屋前に3人だ。行こう」

お仕事の感想は、屋敷の人たち弱すぎ！！侵入して7分で終わりって何！？回復薬なんか必要なかつたじゃん、残念。みんな驚くと思つたのに・・・怪我しないのは良いことなんだけどさ、つまんないや。

・・・・・・視線を感じる、ヒソカからだ。ええっ、自分で腕に傷つけてるよ！？

「腕、いたいなあ？」

「・・・・・・・・？」エリクサー？ビツギ

「ゴクゴクゴク

「はああああ～～～、効くねええ？ありがとう、プ・ラ・チ・ナ？」

「ひいつつつつ、じういたしましてつつ」

ヒソカのことは嫌いじゃないけど、あの反応は変態すぎでムリ！！

パクノダとマチが料理してくれたクリームシチューや食べながら、クロロにヒソカのことを話したら「バカだろ」って言われました。そうだよね・・・パクノダにマチ、クーちゃんも慰めてくれます。次は気をつけよう・・・

## 第7話 お仕事参観日（後書き）

次は、クーちゃんと外にお出掛けの予定です。  
お楽しみに。

## 第8話 クーラちゃんおでかけ？（前書き）

旅団は過保護になつてもうこました。

## 第8話 クーラちゃんとおでかけ？

修行もないし、お仕事もないし暇です。クロロに遊ぼって誘つても念字で？一人で遊んでる？つて、本から目も離さず返事するから・・晶石撃つてやつたら窓からほり投げられた。クロロのケチ！

「暇ーヒマーヒまだよーーー」

「暇なのかい？ボクとデートに行こうか？」

「〜つつ、？絶？して後ろに立たないで！…」

「ふふふ？驚く顔がたまらないねえ～？」

「デートしないもんね。マチが怒るし」

「残念？ヨークシンにおいしいケーキ屋さん見つけたのになあ？」

「ケーキ屋さん！？」

「ボクと行つたら食べ放題だよ？」

「食べ放題・・・・・・・・・・・・」

ヒソカとデートしたらマチが怒るけど、ケーキ食べ放題もすてがない。どうするべきか・・・！？そうだ、ヒソカと行かずにクロロにお金もらって行つたらOKじゃん！？そうと決まれば急がないとね。

「ヒソカまたねーーー」

「あらら残念？・・・・・・なんてね？」

ゾワアアツツーーー何か寒気が・・・。そんより私のケーキさん待つてーー全部食べるからーーー

という事で、クロロから無理やりおこづかいもらつてると、パクノダもくれました。マチはウサギのリュックを作ってくれました！もふもふでカワイイの

初めてのお出掛けだから、3人から約束事を言わされました。

？知らない人に付いて行かない

? 知らない人にお菓子をもらわない

? 怪しい人に声をかけられたらても無視すること

? 人を殺す時は裏路地であること

? お金が無くなつたら盗ること

クーちゃんもいるから大丈夫って言つたら、微妙な顔をされました。何で？

3人と一緒にお出掛けの準備します。『ヴァルキリー』から？聖衣ブリタニア・ガーブ？と？聖皇后のティアラ？を出して装備したら完璧、誰に襲われても怪我をする心配はないね。ウサギさんリュックにおこずかいを入れて背負つて、フードを深くかぶつた上にクーちゃんを乗せたたら準備おしまい。

「プラチナ、念の為にこれも持つて行け。小型だから今のお前にも使えるだろう」

クロロがしゃがんでロープをめくつて、皮のケースに入った小型ナイフをベルトに通して腰の後ろに着けてくれました。

「これなあに？」

「ベンズナイフだ。毒が塗つてあるから気をつけて使うんだぞ

「はい、そろそろ行くね」

「飛行船乗り場まで送ろう」

飛行船乗り場に着きました。あと20分ほどで出発するみたい。それにもしても・・・・・

「はい、プラチナ用の電話。困ったことがあつたら電話しなよ？」

b y シャルナーク

「変なもん拾つて食うなよ？」 b y ノブナガ

「土産は酒でいいからなー！」 b y ウボオーギン

「殺す時に拷問すると楽しいね」 b y フェイタン

「怪しい奴いたらぶん殴れよ？」 b y フィンクス

「おなか出して寝るんじゃないよ」 b y マチ

「ケー キばっかり食べないのよ？」 b y パクノダ

「楽しんで来い」 ブヨフランクリン

「・・・はあ～（旅団はいつから過保護になつた？）」 ブヨクロロ

皆が見送りに来てくれました。クロロは溜息ついてるけどね。

「は～い、ちゃんと約束も守るから大丈夫！～行つてきます

「にゃ～ん（いつてきます）」

「「「「「氣を付けるよー！」」」」

約束つて何だ？プラチナが飛行船に乗る前に呟つたのが氣になる  
な、マチなら知つてるだろう。

「・・・おいマチ、約束つてのはなんだ？」

「あ～、力クカクシカジカつて事よ」

「ぶふうつつ！～なんだそりや～？お前ら過保護すぎだろー」

「・・・（殺氣）」

「つつつつ、何でもありません！」

おお～怖つ、これからこの手の冗談はやねえーとな。心臓がいく  
つあつても足りねえーわ。

ヨークシンに到着！ケーキ屋さんがある通りまでは親切なお姉さ  
んが教えてくれました。

何処のケーキ屋さんが美味しいのかな？とりあえず、このカワイ  
イお店にしようつと。

ムシャムシャムシャムシャムシャムシャ、パクパクパクパクパク  
パクパクパクパク

「おいしい～！クーちゃん、おいしいね」

「にゃんにゃん（おいしいね）」

「全部食べたから次行くよ、クーちゃん！」

「いやーー（りょーかい）」「

4件目のお店で44個目のケーキを食べています。

「クーちゃん」のイチゴの酸味と桃の甘さが丁度いいね！ハグハグハグハグ

ハグハグつつ

「こやにやにやんこやーこやん（）のパイのサクサク感がたまらないにや）ハグハグハグつつ

「・・・・・食べすぎじゃないかい？お腹はどうなつてるのかな？」

「これくらい大丈夫だよね、クーちゃん

「にやんにやー（大丈夫にや）」

「へえ～、すごいね？」

「えへへ、そうで・・・・くつつー？なんで此処にいるのー？」

「ふふふつ、気付くのが遅いよ？」

田の前のイスに、ヒソカが座つてコーヒーを飲みながらこつちを見てるよ。

「何でこるの？」

「たまたまだよ？」

「・・・・あやしい、こやー（あやしい）」「

「それより、食べなくていいのかい？」

ピエロの格好した人と一緒に食べてたら田立つじやんか。今日はもう諦めて、明日にしよう。今食べてるケーキを食べ終えて、クーちゃんを頭に乗つけて席を立つてレジに行くとヒソカもついて来た。横からサツとお金出して私のケーキ代を自分のと一緒に払っちゃつたよ・・・絶対何かあるー！

「今日はボクのおじり？お礼に明日、天空闘技場に来てくれないかな？」

ほらー、やっぱり何かあつたじやん。天空闘技場つてあそこ見えてる高いビルだよね。戦つてお金貰つところ。まさか・・・出ろつて言わないよね。お金は盗つた方が早いし・・・それに、ヒソカ

と戦うのめんどくさいし、ヒソカ以外なら勝すやれると思つ。

「とりあえず、何で？」

「ボクが出るからさ？」

「それだけ？」

「ボクと戦つてくれるのかい？」

「それはイヤ！・・・何時に行けばいいの？」

「11時？約束だからね？」

見るだけなら良いかな。それにヒソカが誘うんだからきっと楽しい事があるはずだしね。んじゃ今日はクツキーを買ってホテルに戻ろうかな。晩ご飯を食べるならホテルの方が美味しいはずだし。

## 第8話 クーラちゃんとおでかけ？（後書き）

読んでくれてありがとうございます！

次は、ゾルティック家の誰かに会えたうなつと思ってしまいます。

## 第9話 クーラちゃんおでかけ？（前書き）

キルアはまた今度。  
ゴトーさんが好きです。

## 第9話 クーサちゃんとおでかけ？

約束の11時になりました。初めて天空闘技場に入つたけど、すごい人です。

『ポイント&KO戦！！時間無制限一本勝負－－！』

おお、始まるみたいだね。てかヒソカの相手が誰だかわかんない。ちょこまかちょこまか動いてるから名前はサル吉に決定！それにしてもサル吉移動ばつかで攻撃してないじゃん。勝負なんだからヒソカのこと殴りに行かなきゃダメでしょ。

「ん～、そろそろボクから行くよ？」

ヒソカが動いたね。サル吉の正面に移動して顔面殴つた－！ふつ飛んだと思つたらサル吉ヒソカのとこに戻つて行つてるよ。あれは、ビヨンビヨンするヒソカの？念？だね。サル吉が何か出した！あれつて小太刀だ。勢いを利用して袈裟切りをしようとしてるけど・・・避けられるでしょ普通。ほりやつぱり、避けられた。・・・つまんない。何が楽しいんだか。

その後サル吉は、ヒソカにヨーヨー見たいに遊ばれて場外にさよならでしたとや。

「やあ、プラチナ？」

「来てつて言うから来たのに、せつきの何！？面白くなかった」

「にゃーー（サル吉弱すぎにゃ）」

「（サル吉？）予定はあるかい？ボクは友達に会いに行くんだけど？一緒にどうだい？」

「友達は面白い？」

「変わつた友達だよ？」

「じゃー行こうかな。ビニに行くの？」

「お楽しみ？」

という事で、ヒソカの友達に会いに行くことになりました。

ヒソカに友達いたんだ・・・もしかして類友じゃないよね。ちょ  
い不安だな。

『皆様本田は号泣観光を』を利用していただきまして、誠にありがとうございました』

『早速ですが、デントラ地区が生んだ暗殺一族の紹介をしていきま  
しょう・・・うんたらかんたら』

『はい、類友決定ー。暗殺一族に友達がいるんだね。

「ほら、もう着くよ?」

「クーちゃん着くつてわ」

「こやー（ひまー）」

「ここがゾルティック家ね。本当に門がめちゃ大きいですー・ヒソカ  
が入る見本を見せてくれました・・・6まで開けたからびっくり。  
だって自力だつたんだよー!? 負けたくなかつたけど、3までしか開  
きませんでした。悔しい————!!

「拗ねた顔もカワイイね?」

「拗ねてないー!!」

あつとこう間に到着。『トーフていつ執事さんが部屋まで案内し  
てくれてます。

「ありがとう、『トーフさん』

「いいえ、お気になさらず。どうぞお入りください」

ああ、イルミがお茶飲んでるよ。

「ヒソカその子なに?」

「クロロ達と暮らしてるプラチナだよ~プラチナ、彼はイルミって  
いうんだよ?」

「はじめまして、プラチナです」

「ふ〜ん、よろしく。座つて食べたら?」

「良いの?」ただきまーす」

意外とやさしい。イルミの前にヒソカと座り、紅茶と一緒に用意されたケーキを食べるとヒソカが自分のケーキをお皿」と渡してくれます。

「くれるの？」

「アモリーム？」

見直したよヒソカ！あなたは良い人だね。ハグハグハグーーーっ  
ヒソカの分を食べ終わつたとき・・・イルミもケーキをくれまし  
た！！

「ゆっくり食べなよ、もつと持つて来させるから」

「ハグハグつつ、ありがとう！ クーちゃん食べないの？」

いつもなら一緒にケーキを食べるケーちゃんが、頭から降りてヒソカとの間に座つたまま動かない。

「どうしたの？」

すると前と横から笑い声が聞こえてきた。

「何で？」

「それ、毒入りだから・・・」

毒入り？毒入り！？毒入り！

——！？聖衣ブリタニア・ガーブ？が無効化してくれてるんだ。

「クーちゃん気付かなくてごめんね。ちょっと待つてね」

『ヴァルキリー』から毒回復アイテム? バニッシュ? を出して、

「クリちゃん先づ大丈夫だよ!!」

「にゃーん（プラチナ大好きー）」

「今のは念能力だね、初めて見るタイプだよ」

「面白いだろ？」

ケーキを食べ終わつてヒソカを見たら、もつ用事は終わつたんだつてさ。速いね・・・それに、ホームに帰らうかだつてさ。別に他にする事ないから一緒に帰らうかな。

ゾルディック家の門までイルミが一緒に来て、赤いスカーフをくれました。どうしろと?つて見てたら、ウサギさんリュックの首に巻かれて「カワイイよ」だつてさ。イルミはカワイイのが好きなのかな?

「油断も隙もないね?」

意味わかんない。

ホームに到着!私は帰つて来た――――!

さつそくクロロに会いに行きます。何してたのか話したら「変態にも気を付ける」つて言われました。私もそうだと思います。「ゴメンネ。ウサギに付いてる赤いハンカチは「・・・大丈夫だろ(発信器だな)」だつてさ、何が大丈夫なんだろうね。

みんなへのお土産はゾルディックワイン・ゾルディックビール・ゾルディックジュースを買いました。好評で良かつた。今日は久しぶりに皆でご飯を食べました。なんかみんな喜んでるけど何かあつたのかな?

「祝!はじめてのおでかけ成功!」

プラチナは気付かないだろうな、今日の宴会のテーマに・・・旅団も平和なつたもんだ。b ゆクロロ

## 第9話 クーラーちゃんとおでかけ？（後書き）

次は、ハンター試験の予定です。

## 第10話 ハンター第一次試験だよ？（前書き）

やっぱり小説って難しいです。

## 第10話 ハンター第一次試験だよ？

お出掛けから帰ってきて、1ヶ月たちました。

今は、ヨークシンのデパートで買ったお昼寝用のイチゴケーキクッショングで、クーちゃんとクロロの隣でお昼寝を楽しんでます。本をめくる音が微かに聞こえたり、たまにクロロが頭を撫でてくれたり・・・ほのぼのしてたら邪魔者が来ました。

「ようこそ変態さん。

「やあ？ そんなに睨まないでよ？」

「にゃーーっ！！（変態撲滅月間ーーー）」

「クーちゃんに賛成～」

「・・・ヒソカ、何をしに来た」

「無視された、にゃんにゃ（スルーだ）」

「今年のハンター試験、プラチナもどうかなと思つてね？」

ハンター試験ね。ヒソカって去年のハンター試験面白くないからつて、試験官を半殺しにして帰つて來たんだよね・・・付いて行つたら絶対遊ばれる氣がする。一人で行つてもうおつ。

「嫌です！ ホームから出ないもんね」

「ハンターになれば便利だよ？ ねえ、クロロもそう思つだろ？ ボクと一緒になら安心だしね？」

「・・・（プラチナは嫌がつてるな）」

必死に田でクロロに訴えてる最中です。キラキラうるさい――

「ム！――！」

「・・・諦める、ヒソカと一緒に受験してこい」

「決まりだね？ 明日の朝に出るから準備しておきなよ？」

「クロロのバカ、バカ、バカ。にゃー（おでこばか）」

「・・・絶対に行つて來い」

「という事で、ハンター試験を受験することになりましたとや。無

念。

～ハンター試験を受験するにあたっての、お約束～ by 幻影旅団

?変態に気を付ける」と

? 念能力で変身は出来るだけしないこと

? 試験官は殺さない」と

? いのな一人に食べ物をもつては一二三

～おやつせ計画で食べられる？

クーちゃんにお出かけした時も約束をしたので、今回もくわんと

うに嬉しいと思します

今回の装備は、？聖衣シルフ・レッド？？聖皇帝のティアラ？？  
スエード・ブーツ？？ヒール・ピアス（自動的に回復）？？レジス  
ト・チャーム（異常にならない）？です。・・・やりすぎじゃね？  
ちなみに、クーちゃんには？手織りのバンダナ（毒無効）？を装備  
させました。

ウサギさんリュックには、パクノダがつくってくれたクッキーが5袋とマチがくれたアメとチョコが入つてて、クロロにもらった小型のベンズナイフは腰にあります。フードをかぶつてクーちゃんを

「プラチナ、行くよう?

「ホーリー」レフン(ホーリー)

定食屋に到着。

「いらっしゃーい！ー」注文は？

「ステーキ定食？」

「焼き方は？」

「弱火でじっくり？」

「あいよー、お密さん奥の部屋にびりわー」「メロンクリームソーダもお願いします！」

「プラチナ、ダメだよ？」

「はーい」

お肉食べてたら会場に着きました。ヒソカは44番で、2人組が入ってきたから47番になりました。

「ボクは向こうにいるよ?」

「わかった、またね」

周りをキヨロキヨロしてたら、赤鼻が近寄つて来た！あんな奴と話したくないから逃げるもんね。

到着してから1時間・・・んん？すごい人が来たよ。あんなに針いっぱい刺して痛くないのかな？あつ、ヒソカと話してる。ヒソカの知ってる人なんだ！聞きに行こうっと。

「ここにちは、ヒソカの知ってる人？」

「誰だと思う？」

「カタカタカタカタ」

「にやーつ（わかったー）」

「・・・もしかして、イルミお兄ちゃん？」

「正解、でも今はギタラクル」

「ギーちゃんね」

「・・・ギタラクル」

「にゃん（ギーちゃん）」

「諦めなよ？」

という事で、ギタラクルはギーちゃんになりました。

さうに2時間たちました。

最近は原作知識がだいぶ薄れてきて不安だけど、この世界に馴染んできたつて事なのかな・・・。

チン・・・ウイイーン

3人組で主人公の到着。楽しい試験の始まりやね。

ジリリリリリリリリリリ

「ただ今をもって、受付時間を終了いたします。では、これよりハシタリ試験を開始します。

サハリ一 次試験は走るだけやねんわ。 もうあえず、サエシさん

ゴンとキルアの後ろを走つてます。話しかけるきつかけないかな・

「いつの間にか先頭になっちゃったね」

・・・たしかに遅いよね・・・

くでくれたのかな

「猫が唄つてゐるし・・・」

「さうか、おいかわ（この仕事）が、ちがつた」

「オレはキルア。」

「私はプラチナ、10才だよ。よろしく」「いや（よろしく）」「うん、頑張るうね！」

クーちゃん残念でした。念文字わかんないみたいだよ？

「今度さ、クーちゃん抱っこさせてくれる？」

「良いけど、ひつかいたら」「めんね」

「大丈夫、楽しみにしてる！」

という事で、ゴンと約束をしたけど・・・それより早く終わんな  
いかな。やつと階段の出口が見えてきたよ。なんかヒソカがそわそ  
わしてきてるなあ。大丈夫かな？

## 第10話 ハンター第一次試験だよ？（後書き）

明日は出かけるので、だぶん更新できないです。

## 第11話 ハンター第一次試験だよ？（前書き）

プラチナは意外と残酷好き。  
だって育てたのは旅団ですから。

## 第1-1話 ハンター第一次試験だよ？

ヌメーレ湿原についてサトツさんが説明しています。騙されたら死にますよだって。

「そいつは偽物だ！ 本当の試験官じゃない……ヌメーレ湿原に住む人面猿が化けてるんだ！！」

人面猿を引きずって着た人が騒ぎはじめ、受験生たちに自分こそが本当の試験官だと話しあげはじめる。話を信じはじめた一部の受験生が戸惑いを見せ始めたその時。

シュシュシュンー！ ··· ギヤアーッ

「なるほど、なるほど？ これでビッグが本当の試験なのかわかつたね？」

あ～あ、殺つちやつた。注意しただけじゃヒソカは反省なんかしないのに。サトツさんの代わりにビシッとしたてあげようかね。湿原を走り始めてから？ 絶？ でヒソカの後ろに回り、肩に飛び乗つて髪の毛をつかみひっぱつてみました。

「ヒソカ～～、サトツさんに迷惑かけちゃダメでしょ！」

「分かってるよ？ プラチナ、霧が濃くなったら遊びを始めるんだけど、一緒にやらないかい？」

「どんな遊びなの？」

「試験官ごっこ？ サトツのお手伝いだよ？」

サトツさんのお手伝い···どうしようかな。霧が濃くなつてからだから、後ろから順番に殺していくだけだから簡単だよね。クーキゃんはどうでも良いみたいだし···。  
「ちょっとだけでも良いよ？」

「じゃ、ちょっとだけする」

「にゃんにゃ（皆殺しだー）」

「それも良いね？」

「ダメでしょ！？」

試験官じつこをすることにした2人と1匹は、霧が濃くなるとともに受験生の最後尾に移動し始めた。プラチナはヒソカに肩車をしてもらつたままで、降りる気はない無いようだ。

「始めようか？」

「おうー」「にゃん（頑張って）」

ヒソカは受験生たちめがけてトランプを投げ、プラチナは晶石を顔面に狙い撃ちはじめた。

トランプは目や口、首に刺さつてはいるが死んではないヒソカに比べ、プラチナが撃つた晶石は、顔面に風穴があき、傷口から凍りはじめ最後は首から上が碎け散つていった。

「ぎゃーー、やめてくれーー！」

「そう言われるとね・・・サービスしたくなるの」

プラチナは逃げる受験生の両腕を狙つて晶石と撃つた。

「お、俺の腕があああーーー！」

両腕が指先からジワジワと碎け散つていく・・・受験生が叫んでいると晶石が脇腹を貫通。傷口が一瞬で凍りつくために受験生はまだ走つて逃げるが、両目に晶石が刺さり頭部が弾け飛んだ。

「さすがプラチナだね？」

ヒソカの一言がさらに恐怖を与える、フードを子猫が押さえているので顔は見えないが、弧を描いて笑う口元が見えるだけで少女は不気味な雰囲気を醸し出していた。

この時、最後尾を走っていたグループには2人が死神に見えただろづ。

「にやーうにやんう！（ヒソカ14人、プラチナ17人。プラチナの勝ち！）」

「よしや！！」

「残念？」

「んじゅ先にもどつてるから～」

ヒソカの頭から降りて先頭目指して走つていると、ゴンがレオリオに前に来た方がいって言つてるけど、その通りかもね。だつてヒソカまだまだ殺る気満々だもんね。

予想通りヒソカが後ろで殺りまじめ、レオリオの声を聞いたゴンは後ろに走つていった。キルアは「ゴンを見送り、プラチナはギタラクと走り何もなく2次開場に到着。ギタラクルはヒソカに電話をし、2次会場の場所を教えて、ヒソカが来るまでの間プラチナにクッキーを4枚もらつて食べていた。

しばらくすると、ヒソカが人面猿を連れて戻つてきたので、晶石を撃とうとしたらレオリオだよと言われ、よく見たら本当にレオリオだつた。驚いていると2人が笑つて見てくるから、ちょっと離れてやる。

2次試験は正午から。拗ねて一人で待つていると、キルアとゴンが近づいてきた。

「プラチナー、クーちゃん抱かせてくれる？」

「いいよ、クーちゃん」

「にや（イヤ）」

「痛つ、ひつかれちゃつた・・・」

やつぱりダメでした。クーちゃんは「ゴンが嫌いみたい。

「にや（キルアはスキ）」

「うわあ、オレに懐いて来た」

「キルアは好きだつて」

「オレ動物に嫌われたのはじめてかも・・・」  
「ごめんね、クーちゃん好き嫌いあるから」

キルアに懐いたのは血の香りがするからかな。クーちゃん血の香り好きだもんね。というか、血の香りがしない人に抱かれたのってゴンが初めてかな。旅団の皆にヒソカ・イルミ・キルアって皆血の良い香りがしてるもんね。

ゴンがショックを受けていると、2次試験開始時刻になりました。プラチナはヒソカ・ギタラクルの所に戻る。そわそわしていると、ギタラクルがプラチナの頭を撫で撫で・・・

「大丈夫」

「大丈夫だよ？」

2人に声をかけてもらつて落ちついたプラチナは、だんだんと開いていく扉を見ながら頷いた。

## 第11話 ハンター第一次試験だよ？（後書き）

次は、第2次試験です。

## 第1-2話 ハンター第一次試験だよ（前書き）

わざと流しました。

## 第12話 ハンター第一次試験だよ

扉が開くと、ソファーに座った女性と後ろに立った男性の2人が見えた。

2次試験の試験官は2人で、両方とも美食ハンター。試験内容はまず、男性が出題する料理を作り合格すること。合格者だけが女性の出題する料理を作る事が出来、合格者が2次試験通過となる。

「オレの出題する料理は、豚の丸焼！オレがお腹いっぱいになつたら終わりだから！」

「2次試験開始！」

プラチナが森に入つて行くと、グレイとスタンプが暴走して来た。突つ込んできた豚の頭に回し蹴りが決まる。豚は吹つ飛び、木をなぎ倒して絶命。

焼くだけなら出来るもんね～。フェイタンと一緒に人を火炙りにした事があるから簡単だね！

焼いた豚を持って行き、食べてもらつて無事に合格出来ました。

「終了了了！！」

70頭の豚完食、男性の料理審査では70名が合格。次は、女性の出題する料理。

「私が出題する料理は、スシよ！…ヒントはこの中にある、最低限必要な道具と材料よ。スシはスシでも、ニギリズシしか認めないからね。料理開始！！」

「ヒソカー、ギーちゃん。スシって食べた事ある？」  
「ないよ？」

「……お腹すいた。いやんこ（ゴハン）」

「一ノ」に豚がある

「焼き豚——！！」

という事で、3人と1匹で焼き豚を食べていると試験が終わってました。

再試験は、ゆで卵をつくる事になりました。

ゆで卵大好き——つていうか、会長がいつの間にか来てたよ。  
飛行船で山の頂上に行き、女性の試験官が見本に崖を飛び下りて  
を取ってきました。

「ち、う、だ、ね、？」

ク  
一  
ち  
や  
ん  
本

クーちゃんを頭に乗つけたまま崖にダイブ。ゆで卵は大好きだから、ひと房全部とっちゃいました。3つはクーちゃんと食べて、残りの5つはウサギさんリュックに入れといて後で食べようつと。

「2次試験終了、合格者42名！」

飛行船に乗つて3次試験会場に移動するんだつて。到着は明日の朝8時くらいで、今はまだ夜の9時。何しようかなつて考えてたらゴンとキルアがやつてきたよ。

「三井物語」編海賊船の事

「うん、にやー（キルアーノ）」

「ウサギ」

クーちゃんがキルアの頭に移動しちゃいました。ゴンと一緒に、あわてるキルアを笑つて探検ヘレツツゴー！まずは、夜景を見に行く事になりました。

「うわーすいーいなーーーーー

「見ろ！人が△△のようだーーーいやいやいやーー（△△のようだー

۱

・・・・・ナラチナ大丈夫か?』

「いいの、言つてみたかつただけだから」

3人と1匹で夜景を見てたら、ゴンがキルアに家族の事を聞きは

「オノの観、西ノハラの段へ愚ジギヤ

「そ、う、な、ん、だ、」

「いやー（だからスキ）」

「アラモアナは？」

死人本

「ニヤニヤせん」

ゴンが話を変えて、キルアの話を聞いてるヒ

た。

「ワシとボール遊びせんか?」

「...」

会長嫌いだし、汗のテンションにも疲れだし、そろそろヒソカのところに戻ろうかな。

私は寝るからやめとくな、ばいばい

広場に戻ると、ヒソカがトランプを崩して1人で笑つてたよ・・・変態さんだ。皆との約束？番は、変態に気を付けるこだから近寄らないでおこうっと。でも、ひとりじや寂しいからギーちゃんの隣で

朝になつて目が覚めると、ヒソカ・私・ギーちゃんの順で寝てましたとさ。

「うみー、クーチャンはヒンカのお腹の上で寝てました。

「ギーちゃんよりヒンカが好きなの？」

「ひーーんこ（だつて、ギーちゃん今キモイ）」

「……？」

クーチャンの念序にショックを受けた様子のギーちゃんつてカワ  
イイね。

まあ、もうそろ到着です。3次試験もがんばるぞ――

## 第1-2話 ハンター第一次試験だよ（後書き）

次は、第3次試験のトリックタワーです。  
1人で行く予定です。

## 第13話 ハンター3次試験だよ

予定時刻より遅れて到着。3次会場の塔の屋上に受験生全員が集合した。

第3次試験は、生きて下まで降りること。制限時間は72時間。

1人が壁を降りて行って、鳥のえさになりました。

ヒソカとギーちゃんは先に行っちゃった。一緒に行くかい？って誘われたけど断つたの。だつて、後が怖いし。どの扉にしようかな。・・あつ、クーちゃんが呼んでる扉にしようっと。

扉を通して落ちたら、ジエットコースターみたいな滑り台でした。「きやーーー、クーちゃん楽しいねーー。にゃんにゃー（田がまわるー）」

アベシツツー！

勢いよく到着！鼻うつた・・・地味に痛いです。クーちゃんは軽やかに着地してくるじやん、ちょっと悔しいー。

場所の確認をしたら、変な人が3人いました。何だらう？

『いらっしゃい、受験生さん。君が選んだ道は、闘いの道だ。ルールは簡単、これから進む部屋にいる対戦相手を降参もしくは殺せば君の勝ち。君が負けを認めた場合、10時間のペナルティーがつき別室で過ごしてもらつ』

「殺しても良いの？」

『殺しても良いが、相手も君を殺すつもりでくるからね。彼らは犯罪を犯した死刑囚、君に勝つと彼らは希望する物を手に入れる事が出来るルールもある。頑張る事だ』

殺しても良いなんて、嬉しいな。だつて殺さずにつて難しいんだ

もん。

「さあ、初めの相手はオレだぜ。子どもだらうと手加減はしないからな」

「ヒヤツハ―――子ども子ども子どもだ―――」

「君の血はキレイだらうね」

死刑囚たちはプラチナに向かつて話しかけ、怯える姿を期待していた。自分こそが子どもをいたぶつて遊ぶのだと考えていたが、子どもから溢れてくる冷気に気が付いた。表現しがたい恐怖が足元から這い上がつてくるのを感じた。そんな時、子どもの笑い声が聞こえてきた。

「ねえ、コレ読める人つていの?」

「にやーにやん(皆殺しにするからねー)」

「さつきから、クーちゃんにお願いして出してもらつてるのに。残念、次に期待しようかな」

がつかり。3人もいたら誰か1人は、念が使えるかなつて思ったのに・・・

それに、自分が凍つてる事にも気付かないなんて、信じられない弱さだね。

「気付いてない?動いてみたら分かるよ」

「はあ!?何を粹がつてるつひとつつ、うぎやああ――――!――!

!」

「お、俺の足があああ―――」

「血が流れないとおおお―――」

氣付かないうちに凍らされていた死刑囚たちは、砕け散つていく自分の身体を見て叫び声をあげた。

「助けてくれ!俺は降参だ!――」

「じゃあ、ご褒美をあげるね」

につこうと笑いながら、頭部に晶石を撃つた。砕けていく人つてキレイだよね。

「次の部屋に行こう、クーちゃん  
にゃん(つぎー)」

次々と容赦なく囚人を皆殺しにするプラチナ。

カメラで様子を見ていた試験官は、プラチナの念能力と猫が念字を出来ている事に驚いた。今年の新人の質の良さに感心しつつ、用注意が必要だと感じた。カメラには、プラチナが一階に到着したのが映っていた。

『47番 プラチナ 3次試験通過 第2号ー！ 所要時間、7時  
間3分』

一階に着いたら2番目でした。初めだけ滑り台だったけど、後は延々と歩きでちょっと疲れたかも。

「やあ？ 思つたより遅かったじゃないか？」

「ずっと歩きだつたもん。子どもの歩幅じゃ仕方ないでしょうが」

「にゃんちゅ（おやつたべよー）」

「ボクも食べたいな？ イルミにあげてただろう？」

「4枚だけね」

ウサギさんリュックからクッキーとゆで卵も出して食べてると、ギーちゃんが到着しました。ギーちゃんも仲間に入れて、どんな道を通つて来たのか話したり、3人でトランプをしたりしたけど時間がまだまだ残つてます。鬼ごっこしようつて誘つたけど断られちゃいました。

「プラチナはクルタ族だよね？」

「・・・何で知ってるの」

「それは簡単？君が来た時期を聞いたことと、今の反応で確信したかな？」

確かに旅団の誰かに聞いたら、私が来た時期くらいは答えるかもね。でも、それを知つたからってヒソカに何かあるわけでもないの

に、何が言いたいの？ 旅団にとつて良くなければ殺すべきかな。  
「殺氣を出さなくても良いよ？ 生き残りがいるのを教えてあげよう  
と思つただけだよ？」

「クラピカでしょ。知つてるわよ」

「<sup>クモ</sup>旅団に復讐を考えてる事も？」

「・・・ それが何？」

「それだけだよ？」

絶対面白がつてゐる。私に教えて、クラピカと戦わせようとしてる  
？ それとも、他に目的がある？ ヒソカが何を楽しみにしてるの  
か、原作知識が震んで分からぬのが気になる。旅団に何かあつて  
も、皆強いから大丈夫だと思うし、神様からもらた念能力で必ず返  
り討ちにしてやる。

試験終了まで、後12時間。次の試験に備えて寝ることにしました。

寝始めたプラチナを見つめるヒソカが、いつもにも増して気持ち  
悪かつたと、寝起きにギタラクルから聞かされました。

変態め！！ いつか本当に駆除してやる！！

## 第13話 ハンター 3次試験だよ（後書き）

第4次試験はサラッと流す予定です。

## 第14話 ハンター第四次試験だよ（前書き）

ハンゾーも意外とスキです。

あのツルッパゲなところが好きです。肉つて書きたいな～

## 第14話 ハンター 第四次試験だよ

第四次試験内容は、狩る者と狩られる者でナンバープレートを奪い合うこと。

くじ引きで引いたナンバーが、<sup>ターゲット</sup>獲物でナンバープレートを奪えれば3点。<sup>ターゲット</sup>獲物でないナンバープレートは1点。自分のナンバープレートは3点。合計6点集める事が出来れば、四次試験合格。場所はゼビル島、滞在期間は1週間。第三次試験の通過時間が早い人から出発となる。

今はゼビル島に移動中です。

47番プラチナのターゲットは、198番でした。3人兄弟のうちの誰かだね。ヒソカのターゲットは384番で、ギーちゃんは371番だって。誰かわかんないや。

ゼビル島に到着。

トリックタワーの通過時間が早い人から出発していく。1番のヒソカが出発した2分後、2番のプラチナが出発した。

3兄弟の後を何となく付いて行きながら、クーちゃんとチヨコを食べています。昨日から3兄弟のうち1人がキルアの事を狙つてみたいだけど、全然仕掛けないんだよ。ビビリちゃん、頑張つたらいにのに。

応援してたらキルアに声かけられて、ビビリちゃんがビックリしてます。

どうするのか見てたら、2人が戻ってきて3兄弟が集合。どうやら陣形を組むみたい。でも、あつという間に負けちゃつた。

キルアのターゲットは199番だってさ。残りは投げられちゃつた。私が欲しいのは198番。最初に投げられたのをキャッチしたら197番・・・仕方ない、反対側に投げられたの探しに行こうつ

あと5日あるので、のんびり歩いてたら忍者がやってきました。

「ほんにむかせ、忍者わん」

「『やー』（つるつるぴかぴか）」

「・・・お嬢わんほんにちは。でもその猫、絶対俺の懲口言つた氣がするぞー！」

どうやら勘が良い忍者さんのようです。

「忍者さん何か用？私がターゲットなのかな？」

「違う、俺のターゲットは197番だ」

「！－197番持つてるよー。他にもプレートあるなら交換してもいいけど、番号によるかな？」

「俺が持つてるのは、89番と198番だ。」

「んじゃ、198番ちゅうだい」

「わかった、交換しよー」

忍者が198番持つて良かつた、これで6点集まつたね。

今日は、日当たりのいい所を見つけてお昼寝して、クッキー食べてのんびりしようかな・・・

♪♪♪♪♪

「もしもしし～プラチナとクーチャんです」

「やあ、久しぶり？プレート見つかったかい？」

「見つかったよー、ヒソカは？」

『ボクも見つけたよ？青い果実が育つてきたしね？』

「・・・それで、何かよつ？」

『大きな猪がいてね、一緒に食べないかい？』

「食べるー！」

『じゃあ、待つてるよ？』

メールの地図を見ながら到着！猪鍋の良い匂いがたまりません♪

残りの数日は、結局ヒソカと一緒に過ごしました。お鍋のお礼に？エリクサー？をあげたら喜んでくれたけど・・・川でク一ちゃんと水遊びをしてたら、横で裸になつて身体を洗うのやめてほしいです。

「プラチナのヒッチ?」

ヒソカがエロいの間違いでしょ！？

放送が流れたので、出発地に戻る途中でギーちゃんに会いました。今まで何してたのか話して、ヒソカにエッチって言われた事につ

「アーティスト」

何でそんな答えになるの！？

私見たいって言った！？　言ってな  
やつぱり一人は類友だ――――――――

とりあえず、無事に四次試験合格できました。

## 第14話 ハンター 第四次試験だよ（後書き）

読んでくれて、ありがとうございます。

次は、最終試験です。

戦闘シーンがある予定で、頑張って表現したいと思います。

## 第15話 最終試験だよ（前書き）

クラピカが好きな人ゴメンナサイ。  
戦闘シーンって難しいです・・・。

## 第15話 最終試験だよ

皆で気球に乗つて移動中です。

クーカヤとお風呂に入つて、ポカポカしていると放送が流れました。どうやら、一人ずつ会長と面談するみたいです。

『受験番号47番。47番の方は、2階の第1応接室までおこし下さ』

応接室に入ると、会長が一人で座つてました。

「そんなに緊張せんと、座つたらビリジヤ」

「・・・なあに」

「2、3質問するだけじゃ。まず、なぜハンターになりたいのかな

？」

「ハンターになれつて言われたから。便利だし?」

「だってクロロが、絶対取つて来いって言うんだもん。自分でなりたいわじゃないし。

「そうか。では、自分で一番注目している受験生は?」

「99番かな。404番も気になるけど・・・」

キルアは気になるね。だってイルミの弟だよ!?もう少しあと話してみないとわかんないけど、ゾルティック家の子だから遊んだら楽しいそうだよね。クラピカは、旅団に復讐ケモしたいらしいから気になる。もし、戦いを挑んできたら皆と遊んであげようつかな。

「最後の質問じゃ、一番戦いたくないのは?」

「405番!」

テンション高すぎて、ウザいもん。つい殺したくな。

「ふむ、わかつた。さがつてよいぞ」

「にやー（ちょんまげザムライ？）」

「・・・似合つてゐるね」

「ふお！？」 そうじやろー」

47番、プラチナという名じゅつたな。変わつた子じや、子どもなのに血の匂いが濃かつたのぉー。それにあの猫が気になるの。動物が名字を使つてゐるのを久しぶりに見たわい。

本当に今年の新人は質が良すぎるわい。

4次試験終了から、3日たちました。委員会が経営するホテルで休憩中です。

『受験生の皆さん、1階の奥、大広間の方へお集まりください』

大広間に受験生が集合すると、会長がボードの前に立つて説明を始めました。

どうやら会長が決めたトーナメント戦で、1勝すれば合格となるらしい。ルールは簡単、相手を殺さず「まいつた」と言わせ者の勝ち。反則なし、武器は使用可。

プラチナの対戦相手は、404番クラピカでした。負けた方がヒソカと対戦だつて。やる気が無いのに、合格するチャンスが多いつてどういう事？しかも、気になる相手と戦えつて、めちゃ嫌がらせやんか！

「最終試験を始めます！ 第一試合、ハンゾー対ゴン！ それでは、始め！」

いつの間にか始まつてました・・・それにしても、ゴンつてしまといなあー 良かった、ゴンの相手じゃなくて。イラつとして殺しちゃいそやし、もし殺しそうになつたらヒソカに怒られるしね。

結局、ゴンの粘り勝ちになりました。係員の人に抱えられて、退場して行きました。

「第2試合、クラピカ対プラチナ！ 始め！！」

どうやって戦おうか考えてたら、クラピカが話しかけてきました。  
どうやって、手加減しようか悩んでたけど誰が手加減してやるもんか！ って感じになつたけどね・・・

「プラチナ、君には悪いが手加減するわけにはいかない。まいつたと言つてはくれないだろ？ ジュミみたいな女の子に、手をあげるのは気が引けるのだが・・・」

「・・・・・」

「戦うというのならば、本気でくる事だ！」

クラピカつてこんな人でしたっけ！？ キャラ変わってるよね！

？ お前の方が弱いくせに・・・

「プラチナ、殺しちゃダメだよ？」

「分かつて、クーちゃんお願ひね

「いいよ？」

ヒソカにクーちゃんの事を頼みました。

「手加減しないのは、私の方なんだから！！」

「いくぞ！！」

2人は同時に、相手に向かつて突っ込む。クラピカは一刀流の木刀で、プラチナは素手で激突。初めに仕掛けたのは、クラピカだった。左右から叩き込みつつ、プラチナの死角から脇腹めがけて蹴りをいた。プラチナは自ら後ろに飛び、勢いを殺し着地と同時にクラピカの背後へ瞬動。クラピカが気付いた時には、背中に拳を撃ちこみ仕上げに脚で蹴りあげ、回し蹴りを6連続で打ち込む。

倒れたクラピカに、レオリオ・キルアが声をかける。

「外野、煩いよ！」

フードを下ろしながら、クラピカを見つめました。クルタ族ならばすぐにわかるはず。

「プラチナ、君は！！」

「やっぱり分かるんだ」

「……あの時、泉に行つたら君はいなかつた。ギルディアさんの死体だけだつた、君が生きていて良かった。きっとギルディアさんも喜ぶだろう」

もしかしなくても、父親の名前を初めて知つたよ。ギルディアつて名前だつたんだ・・・

「君もギルディアさんの？紺の眼？を取り戻すために、ハンターを目指しているんだね。私も皆の？紺の眼？を取り戻すために・・・

・・ベラベラベラ」

自分の世界に入つて話してゐるよ。私は？紺の眼？とかどうでもいいんですけど。生まれてすぐに、色が違うからつて泉に沈めた奴らだよ？なんでそんな奴らの？紺の眼？を取り戻さないといけないのか。

「クラピカ、私は？紺の眼？を取り戻したりしいないよ  
「なぜ！？」

「自分を殺そうとした奴らなんて、どうでもいいもんでしょう？」

「！？・・・・・・そうか、残念だ」

1人で落ち込んでるところに近づき、足を払つて背中の上に立つ。蛙が潰れた様な声がしたけど、ジャンプしてさらに踏みつけた。

「ぐああああ――――！」

「まだ言わないなら、背骨折るからね　」

「・・・まいつた」

「勝者、プラチナ！」

クラピカは、レオリオに支えられながら壁に移動して、少し休憩

するみたいです。

ちょっとやりすぎたかな？クラピカの次の対戦者つてヒソカで大変だと思つから、こつそり？エリクサー？出して様子見に行こうかな。クーちゃんをヒソカから受け取つて、頭に乗つけながら近づいて行つたら、レオリオがめちゃ睨んできます……そりや睨むよね

「大丈夫？」

「大丈夫つてお前な！ 限度つてもんがあるだろうがよ」

「やっぱり？ でもクラピカつて、あれぐらいしないと言つてくれないでしょ？」

「・・・たしかに」

「一応、やりすぎたと思つから。コレあげる」

レオリオに？エリクサー？を手渡す。

「私が調合した薬だよ。クラピカはクルタ族だから、特別に良いのあげる」

「・・・ありがとう」

「どういたしまして？」

クラピカつて優しいね。普通、ボコボコにした相手に謝れる？ちよつと見直したね。

2人から離れて様子を見てると、レオリオがクラピカに？エリクサー？を飲ませて、回復速度に驚いてるね。あれだけ回復したら大丈夫かな。

結果は、ヒソカがわざと負けて、クラピカが勝ちました。

ヒソカなにか考へてるね。きっと悪だくみなんだろうね……

後は、ギーちゃんがキルアの前で変装を解いて、お家に帰るよう説得しました。説得成功したのかな？キルアは、ボドロを殺して失格になつて帰つて行つちゃいました。

他の皆は全員合格、ハンターになれたので講習を受けます。途中で、ゴンが戻ってきてイルミと騒いでたけど、イルミが家の場所を教えたやつと静かになりました。やっぱりゴンって苦手・・・

講習が終わつたら、ハンゾーが話しかけて来て名刺をくれました。携帯の番号・アドレスの交換をしたよ。日本に行つたら観光案内してくれるんだつてさ。他にも、レオリオとクラピカが声を掛けてくれたの。お互い頑張ろうね、また会おうねって話して、番号・アドレスを交換してわかれました。

ヒソカとイルミを発見、一緒に帰ろうつて誘つたら用事があるからダメなんだつて・・・仕方がないから、イルミが骨折してたから?エリクサー?をあげて、2人とは飛行船乗り場でわかれました。飛行船に乗ろうとしたら、ゴン達と一緒にキルアを迎えに行かないかつて誘われたけど、早くお家に帰りたいからつて断りました。めんどくさいじやん。

クーちゃんと飛行船に乗つて、ホームに帰りました。クロロに電話したら、パクノダとマチがご馳走つくつて待つてるぞつだつて。合格祝いにぱくつとしてくれるらしいし、皆と会えるのが楽しみだなあ~

## 第1-5話 最終試験だよ（後書き）

無事に？ ハンター試験を終わる事が出来ました。  
次は、クーちゃんをどうにかしたいと思います。  
猫の寿命って、7年ぐらいでしたよね？

## 第1-6話 えいんふぇりあ（前書き）

猫の寿命を教えてください、ありがとうございました。  
意外と長寿でビックリです・・・

今回のH×Hでは、短めでお願いしたいと思います～  
適当な私でゴメンナサイです。

## 第16話 えいんふえりあ

ハンター試験が終わって、夏になりました。

今は日本にいます。クロロが本を買いに行くところので、付いて行きました。

東京から始まって、名古屋に大阪、現在は京都にいます。本屋さん巡りもしながら、ケーキ屋さん巡りをして、観光もします。日本のケーキっておいしいんだけど・・・。クーちゃんお断りって言われるところが多くて困ります。お持ち帰りにしてもらって、ホテルで食べてるんだけど、お店で食べたほうが雰囲気があつていいんだよねえ～。今まで食べたケーキで私は、イチゴのタルトが一番おいしかったかな。クロロは、チーズケーキとガトーショコラなら食べるんだよ。クーちゃんは、ミルフィーユが大好きみたいです。口の周りをクリームだらけにして食べる姿がカワイイんだよ

クロロを待っています。古本屋さんに入つて1時間。クーちゃんは入っちゃ駄目だから、外でしつとりしながら待つてたんだけど・・・。遅い！！

「クーちゃん、クロロ遅すぎだよね！？」  
「いや・・・（しんどい）・・・」  
「クーちゃん大丈夫？」  
「・・・バタリッ」  
「クーちゃん！？」クロロ、クロローーーーー！」

急いでクロロを呼んで、とりあえずホテルに戻つて？エリクサー？を使って様子を見ることになりました。本当ならすぐに元気になつてもおかしくないのに、クーちゃんはずつと寝たままで。

「プラチナ、野良猫は長くて5年、飼い猫は10年が寿命だ。クーは野良猫からお前の猫になつて、金字使えるようにもなつた。」

「・・・うん、クーちゃんは普通の猫じゃないよ？」

「念が使えても、猫は猫だ。寿命がきても、おかしくはないだろ？」

クーちゃんが倒れて2日目、念字がうまく出せなくなつて？エリクサー？も効果が無くなつてしましました。3日目には、水も飲まなくなつて・・・4日目の朝、心の音が聞こえなくなりました。クーちゃんを抱えて、泣いて泣いて泣きました。ずっと、ずっと一緒にだと思ったのに・・・

「クロロ・・・クーちゃん、楽しかったと思う？」

「・・・ホームに連れて帰るつ。寂しくないようひたしてやろう」

クーちゃんをカゴにそっと入れて、ホームに帰りました。ホームには、パクノダとマチ、シャルナークが待つてくれました。

クーちゃんをカゴから出して、お気に入りのクッショーンの上に寝かせました。お花をたくさん添えて、ローソクに火をつけて、まわりを飾りつけたからちょっと寂しくないかな・・・涙が止まりなくて、ポロポロ泣いてたらマチが抱っこしてくれました。

・・・・・カサカサ・・・・・カサカサ・・・・・

突然、添えていた花が揺れて、ローソクの火が大きくなつた。

クロロが読んでいた本を閉じ、クーが寝かされているクッショーンに近づく。クッショーンに寝かされていいクーを見つめ、微笑みをうかべた。

クロロの動きを見守っていたパクノダ達は、何があるのかとクーを見るがわからない。

「プラチナ、クーをよく見て見る

クロロが笑つてゐる・・・ クーちゃんに何かあるんだ。普通に見てもわからないから? ギョウ? をしてよく見ると、クーちゃんが寝てる横にクーちゃんがいた。

(「いやー」「やんにやーー」 プラチナ、だいすきだよ )

「クーは魂だけになつても、お前の事が好きなんだな」

クロロの言葉を聞いていると頬を流れる涙が止まらないけど、クーちゃんに向かつて笑いかけたらクーちゃんも笑ってくれた。

クーちゃんの魂・・・ 魂がいる・・・ 魂があるんなら! ! ! !  
プラチナはマチの腕の中から出て、クーに近づいた。クーの魂を見ながら『ヴァルキリー』を出し、レナス(23歳・アース神族)に設定を変更。

クロロ達が見守るなか、1人と1匹はお互に歩み寄つていぐ。

「クーちゃん、これからもずっと一緒にいてくれる?」

(「やんにやー ずっとといっしょにいたいよー」)

プラチナの背中に銀色に輝く翼が現れ、羽ばたきながら浮かび上がる。銀翼から輝く羽がまわりに降りそぞぎ、幻想的な景色をつくりだしていく。

クーが銀色の羽に包まれていき、クーの亡骸とともに光の粒となり、プラチナへと吸い込まれていった。光の粒がなくなるとプラチナの銀翼も消え、羽も輝きが薄れて見えなくなつていった。

『ヴァルキリー』が勝手に出てきて、キャラクター一覧が開かれ  
る。そこには、今までなかつたクーがいた。ステータスに異常は見  
られず、『召喚しますか?』と表示が出ていた。召喚をしようとす  
ると、『合言葉をお願いします』だつてさ・・・ 合言葉つてアレ

だよね。

『死の、先を逝く者たちよー!』

銀翼が再び出現し、銀翼が羽ばたくとともに光の粒が降りそそぎ、やがてクーの姿かたちとなつた。

「にゃんにゃ～～（ひさしぶり～～）」「  
クーちゃん!」これからもよろしくね――――――

「・・・・・はあ、なんでもありだな・・・・・」

ヒシツと抱き合つ2人を見て、嬉しいのやら呆れるのやらと感じるクロ口達でした。

## 第1-6話 えいんふえりあ（後書き）

読んでくれて、ありがとうございます～

次回は、ヨークシンのオーラショーンです。いろいろ考えてます・・・  
楽しみにお待ちください。

第17話 9月1日 ? (前書き)

今回も、ヴァルキリーを知らないと分かりにくいかな。  
何となく感じとつてもういたらなあ～～ と思います。

「めんなさいねー

クーちゃんがエインフェリアになつてから、何が変わったのか『ヴァルキリー』を開いて調べました。すると、クーちゃんがえらい事になつてました。どうやら、他のキャラと同じようにレベルを上げるし、スキルアップもできるし、キャラの中でプラムス・フレイの武器が装備できだし・・・剣とか弓・杖は装備出来ませんでした。猫の手だと持てないから?

とりあえず装備出来たの物で、技もできるのか試してみたら出来ました。すごいよ!? 猫なのに、全キャラ最大攻撃力があるエーテルストライク撃つたら、クレーターつくれるんだもん。プラムスの奥義ブラッディカリスなんて、ノブちゃん吹つ飛んでつたし。

クーちゃんには、2人の技をみっちり特訓しました。レベルもスキルもMaxまで上げたので、無敵猫の完成。まあ、フレイとブラムスの技しか使えなかつたんだけどね。

練習風景を見たクロロが、「化け猫か・・・」って言つたのでクーちゃんに光弾の雨を降らされて、逃げてたのは面白かったあ〜〜だつて必死に謝りながら逃げてるんだもん!

以上、クーちゃんの変化でした。  
もうすぐ大きな仕事があるので、クロロとパークシンのアジトに移動したいと思います。

ヨークシンのアジトに到着!

私は旅団に入つてないから、仕事に参加するのは自由だつたんだ

クモ

けど、クロロから今回は参加してほしにって言われてるのに頑張ります。もちろん、クーちゃんも参加するよ。

全員集まつたみたいです。ヨークシンで何するのかな。

「今回の目的は、地下競売のお宝全部。邪魔するものは皆殺しにしていい、俺が許す」

「おおおおお————、団長…俺は嬉しいぜ——」

嬉しいのはわかるよ? マフィア全部敵に回して遊べるからね…  
・でも、ウボオーラー煩すぎ…

今回は奪取組に入りました。ノブちゃんと一緒にいりだつて。出発の前に、クロロ・パクノダの監督のもと準備をします。

「プラチナ、近距離はノブナガに任せたらいい。遠距離攻撃のタイプはないのか?」

「遠距離? あるよ?」

「あるなら、今日はそれにしておけ」「は~い」

『ヴァルキリー』を出して、ラウリイ（18歳・弓闘士）で武器は? 魔弓レイザー・フォーテル? 防具は? エターナリイ・ガーブ? アクセサリーは? ヒール・リング（自動回復）? レジスト・チャーム（状態異常無効）? に設定を変更。

クーちゃんも武器は? 透器エーテル・レイザー? 防具は? エターナリイ・ガーブ? 亡王の仮面? アクセサリーは? クラック・リング（防御破壊）? ヒール・リング（自動回復）? に設定を変更。

今回の約束は、こんな感じです。

? ノブナガから離れないこと

? 皆の回復係をすること  
? おやつの食べすぎに注意  
ちゃんと守りたいと思います。

クロロとパクノダは留守番。

ノブナガとウボオーとクーチャンと一緒に、いざ出発……

「にゃーん、にゃん！…（ここ匂いがするよー、くつわー…）」

「確かに！あの店だ。くつきー買つてきます！…」

「「はあ！？ ・・・ もつ入つてゐる」」

「おいしそうなクッキーがたくさんあります。イチゴ・チョコ・ナツツ・バナナ・リンゴ・プレーン・・・ どれにしようかなあ～」

「プラチナ、約束の？ 番忘れてないか？」

「5つだけにする」

「多すぎだろ！？」

「・・・ 3つなら買つてやるぜ」

「ウボオー・・・ お前甘やかすなよ」

「いいじゃねーか」

「という事で、3つ（イチゴ・チョコ・ナツツ）買つてもらいました。さつそくイチゴクッキーを食べながら歩いてます。

ホテルに到着！ 丁度ホテルに入ろうとしていた、3人のヤクザと入れ替わつて潜入成功 後は始まるのを待つばかりです。私達は、競売が始まつたら入口で逃げて来た人を殺る係なんだけど、殲滅係がフェイタン達だから誰もこっちに来ない気がする・・・

あと1時間で始まりだね。

第17話 9月1日 ?（後書き）

次は、ウボオー拉致事件の予定です。

オークション開催。

参加者が全員、地下競売上に入り、エントランスホールは静かになつた。

しばらくすると、地下の会場から銃声が響き渡る。2人だけ会場から出てきたが、シズクの「メちゃんに殴られ、階段まで行くことが出来なかつたようだ。

階段を登りきつたところで、待ちかまえる3人がいた。

おしかつたけど、入口まで逃げてこれる人はいませんでした。もうちょっとと頑張つて欲しいよねえ

3人と1匹で、お宝回収が終わる合図を待つてたらシャルナーグが慌てて走つてきました。

「3人も、お宝がなかつたんだ。今から気球で移動するから、マチのどこへ行くよ  
「お宝がないだーー!?  
「おいおい、まじかよ・・・  
「いやー (つまんないー)  
「ないの!?  
「ゲームしたかったのに~」

旅団は気球に乗り、移動中。気球を発見した護衛のマフィア達が、車で追いかけてきているのが見える。現状報告をウボオーが電話でクロロにしている。これからどうするのか、裏切り者がいたのではないか、話し合っているようだ。

そのころプラチナは・・・ チョコクッキーを皿にお裾分けしながら食べました。

イチゴも美味しかったけど、チョコもなかなか美味しいねえ

「団長、戦つてもいいんだな?」

『ああ。お前たちが暴れれば、商品を移動した? 陰獣? も出でくるだろ?』

団長との話し合いが終わり、競売品を持ち去つた? 陰獣? を誘き寄せるために、マフィアの雑魚で遊ぶことが決まった。気球を岩山に着陸させ、マフィアが集まるのを待つことに。

私も行きたかったのに、ウボオーが一人で遊びに行っちゃいました。

手を出しちゃダメなんだってさ、ズルくない?

ぎゃーー、ひぎゃーーー

ヒヤツハーーーー!

パンパンー・パンー・

岩山の下では、ウボオーギンとマフィアが戦っているのがよく見える。マフィアは頑張つて銃やライフル、ロケットランチャーを撃つて攻撃しているが、ウボオーギンは全くきいておらず笑っている。

「ゴリラ対アリだね」

「普通の銃じや無理だろ」

「筋肉バカだからね」

「にやにや、にやー! (アホつと踏み潰せー!)」

「プチつと～」

アリが弱すぎて、見てても面白くないね。

トランプで遊びながら？陰獸？が出てくるのを待つことに・・・マフィアが全滅がし、ようやく念能力者が5人近づいてくるのがわかつた。

「出てきたね」

「本當だ？陰獸？強いかな？」

「にゃん（弱そう）」

「確かに」

パンツ一枚男が、地中から突然出てきてウボオーギンを殴りつけたが、ウボオーに殴り返され顔が潰れた。怯まずパンツ一枚男は、ウボオーギンを地中に引きずり込もう試みている。パンツ一枚男は頑張つたが、ウボオーギンの？超破壊拳ヒッグバンインパクト？で吹き飛んだ。他の？陰獸？が襲いかかる。

?陰獸？に露出狂がいる。どこの組にも変態つて生息してるんだね。

ウボオーってゲテモノ食いだつたんだ・・・デブの頭かじつたよ！？ それにしても、デブのヒル気持ち悪いね。毛玉も負けないくらい気持ち悪いけどね。なぜにジャージ！？

はーーー！

ウボオーの大声が爆発しました～

「お前、俺らの鼓膜も破るつもりかよーー！」

「言つてからにじろよな」

「にやにやー（疲れるー）」

?陰獸?との戦闘は終わつたが、毒を盛られたウボオーギンは首から下が動かず、肩の傷口からはヒルが侵入しており、助けが必要な状態になつていた。

首から下が動かなくなつたウボオーを見に行きます。

シズクがヒルの毒を吸いとらつとし、シャルがヒルの退治方法を説明していくと・・・?

ジャララララッ ベロ――ンン――!

ウボオーギンの身体に突然鎖が絡みつき、ウボオーギンの身体を引っ張り連れ去つたが、マチの念糸がウボオーの足につき糸が伸びでいく。

飛んでつちやつたよ!？　あのでかい体で飛んだよ!？　すごいなあつて感心してたら、マチが念糸を飛ばしてくれたから、皆で追いかけるんだけど・・・運転はシャルナーハで助手席にはシズク、後ろにはマチ・ノブナガ・フェイタン。私は!？

フランクリンはウボオーのためにお酒を盗りに行つりやいました。

「一緒に行く!！」

「・・・しょーがねえな、抱っこしてやるよ」

「にやー（ノブちゃん優しく）」

「ノブちゃん言つな!」

プラチナをノブナガが抱き、後ろの座席に4人が乗り、ウボオーを追いかける。

念糸に気付かれたが、相手の車が見えているので問題なく追いつくと思われたその時、

？不思議で便利な大風呂敷！？！？

車のボンネットに男が飛び乗り、念能力を発動させた。男の念能力で包まれた車は、あつという間に男の手に納まるサイズになり、布の内からはナブナガの声が聞こえていた。

旅団たちは瞬時に車から飛び降りたが、プラチナを抱っこしていたノブナガが、プラチナを車外に投げる所以精一杯になり、自身は逃げ遅れてしまったのだ。

「ノブナガは乗っていた位置が悪かたね」

「プラチナを出したのは、褒めてもいいんじやない？」

「布で包んだ物を小さくする、便利な能力だ。これなら商品もポケットに入る。奴が運び屋だね、元の大きさにも戻せるはず」

「いやー（たすけるー）」

「あれ？ ？陰獸？って全部で10人だよね？」

「ウボオーを連れ去ったのは？陰獸？じゃないのか」

「こいつらに聞いたら分かるね」

「お前達が？幻影旅団？か・・・ここで死んでもうつぞ」

「せいぜい悪足掻きをするんだな」

フエイタンが乗り気で？陰獸？と遊び始めたが、すぐに勝負はついた。ノブナガは無事に出てこれたので、布の念能力の男はフエイタンがアジトに連れて行くことに。ウボオー奪還にはフィンクスが加わった。

「馬子にも衣装だな」

「あ？ ぐああつーー！」

ウボオーを縛っていた枷を外し、シズクが毒を吸い取る。ヒルを退治するにはビールを飲むしかないが、体力回復にプラチナの？ノーブル・エリクサー？を飲ませた。

旅団は競売商品を手に入れたので、引き上げることになったのだが、ウボオー・ギンは鎮野郎を殺しに行くと言った。

話題を聞いていたプラチナは、ウボオー見ていて嫌な予感がするはどうしてか考えるが、思い出せそうで、思い出せない。大切なことを忘れてる気がする・・・何があつても対応できるよつ、クーちゃんを連れて行つてもらえたるよつ話してみよ。

「オレは鎮野郎とケリを付けるまで、戻らねえからなーー！」「仕方が無いな・・・ちょっと調べてあげるよ」

「・・・・・」

「どうした、プラチナ。心配すんじゃねえよ、またクッキー買つてやるからよ」

「でも嫌な予感がする。クーちゃん連れて行つて！」

「にゃーにゃん（ついてくよー）」

「しゃーねえな、おとなしくしてねよ

「じゃ、行くよ」

「おうーーにゃん（おひ）」

シャルとウボオー、クーちゃんを見送り、他のメンバーはアジトに戻つていった。

もしも、ウボオーに何かあればクーちゃんが知らせてくれるので、

プラチナもクロロのもとへ安心して戻つて行つた。

第18話 9月1日 ? (後書き)

いつも読んでください、ありがとうございます

第19話 9月2日（前書き）

短いです・・・

プラチナ達はアジトに戻つて行き、クーはウボオーの肩に乗つて、シャルナークと移動中。

何處かのホテルの部屋に入り、ウボオーギンがあつといつ間に中の人に殺しました。

シャルナークは、ウボオーを捕えていたファミリーがノストラードであると気付いた。ノストラードが使用しているホテル一覧をウボオーに渡しながら、ウボオーに声をかける。

「氣をつけるんだよ、ウボオー」

「ありがとよ！ いくぞクー、しつかり掘まつとけ」「いやー（りょつかい）」

ビールを飲みながら、鎖使いを探します。

近場のホテルから襲つて行き、情報を探つてこるとノストラードの娘の話が聞けた。

「娘の占いがよく当たるんだ！ 十老頭にもファンがいて、すういらしい！ お願ひだ何でも話す殺さないでくれーーっぐええ」

「にやんにやう（うらないだつて）」

「ああ、予知みたいなもんだろ。団長の言つた通り裏切り者はいなかつた」

「にやー（あつたりまえー）」

「そうだな、次行くぜーー！」

ビルからビルへ飛び移る、ウボオーギン。

「にやにやつ にやつ にやにやーにやつ にやー にやつ にやー」

「・・・・・ なんの歌だ？ そりゃー」

「にやーんにやー（なーいしょ）」

「？？」

だつてウボオーツ、マ○オみたいにジャンプするんだも～ん  
プラチナとしたゲームに出てきた、ちょびヒゲのおじちゃんにち  
よつと似てる気がするし～

田も暮れて夜になり、やつと鎖使いを見つけた。

鎖使いはホテルの部屋で、待ちかまえていたが、現れた旅団の肩クモに乗つかている黒猫を見て驚いた。その黒猫が、ハンター試験を共に受けた少女が連れていた猫に、あまりにいも似ていたから。

鎖使いがものすごい見てくるんだけど・・・ どつかて会ったのかな??

クーは興味のないものはすぐ忘れてしまつので、クラピカには気付かなかつたようだ。

ウボオーギンは気にせず、鎖使いに話しかける。

「何処で死にたい？ 場所くらい選ばせてやる」

「・・・ 荒野がいい、周囲に迷惑がかからなこよつにな  
「行くぞ」

荒野に到着。

ウボオーギンは鎖使いから離れ、岩山の上にクーを下ろした。

「クー、今からオレは鎖使いと戦う。何があつても近づくんじゃねえぞ？ オレに何かあつたら1人でアジトに戻れ、鎖使いに手を出さない？ わかったな

「にゃーんにゃあ（わかつた、まもるよ）」

鎖使いとウボオーの闘いが、ついに始まる。クーは邪魔にならな  
いよ？？絶？？をする。

「これからは、クーチャンがリポートしたいと思います。

きんぱつさんが、ベラベラしゃべっています。ウボオーはあんまり  
きいてません。

おっと、ニードウボオーがつつこんんだ！！ きんぱつは、よけ  
た――  
ドックーンとして、バカーンってなつて、ボキボキします。  
なんかいわれて、ウボオーがゼンリょくをだしました。  
かつた――――――！

と思つたら・・・ウボオーが鎖に絡まつて、倒されちゃつた。  
ウボオーが死んじゃつた。

鎖使いがウボオーを地面に埋めているのを確認し、クーはアジト  
に素早く戻つて行く。

クラピカが猫の存在を思い出し、周囲を探すが見つけることは出  
来ず、諦めて戻つて行つた。

黒猫を見逃してしまつた事で、女神が本格的に動き始める。

第19話 9月2日（後書き）

文章力が欲しい今日この頃・・・  
いつも読んでくれてありがとうございます！！

第20話 9月3日 ? (前書き)

20話目になりました。  
これからも、原作を大切にしていきたいと思います！

戻った旅団のアジトでは、クロロが静かに読書をし、フュイタンが拷問をして楽しんでいた。ノブナガは、ウボオーとシャルナークの事を伝え、プラチナはクーをウボオーに連れて行かせた事を伝える。

3時間ほどし、シャルナークが戻ってきた。

さらに時間が過ぎるが、ウボオーはまだ戻って来ない。

クロロが鎖使いに付いて考えを話し、夜明けまで待ち、戻つてこなかつた場合予定を変更することになった。しばらくして、もうすぐ夜明けという時に誰かがアジトに入つて来たことをコルトピが感じじる。

旅団が氣を張つた瞬間、プラチナが立ち上がり皆に話しかける。

「大丈夫、この感じはクーちゃんだと思つよ・・・」

すると、クーが慌てたように走つて入つてきてプラチナに飛びついた。にゃーにゃーと必死に声を出し話しかけている。念字が出ていないので、何を話しているのかはプラチナにしか分からず、皆は様子を見るしかない。話が終わつたようだ。

プラチナがクーを抱いたまま『ヴァルキリー』を出し、レナス（24歳・アース神族）に設定を変更すると、クロロに近づいて行く。

「ウボオー死んじゃつたんだって」

「・・・鎖使いにだな、能力は分かるか？」

「クーちゃんの話だと、鎖が急に現れたり、鎖に捕まると念が出せなくなつたり、鎖使いの怪我がすぐに完治してたみたい」

「鎖が急に現れたというのは具現化系か？念を出せなくさせる能力、治癒力強化・・・クー、他に気になつた事はないか？」

「いやーんに、いやんこやう（くもくの、ふくしゅうだつたみたい）」

「そりか・・・」

「いやんにー（わいごわらついたよー）」

「ふつ、ウボオーリシー」

クーちゃんの話を聞いて、皆ひょひょぴり笑つてる。ウボオーフで、戦闘バカだつたから目にしがぶよね・・・それじゃ、私が出来ること、やりに行かなくちゃね。

「クロロ、ウボオーラ迎えに行つてくる。ウボオーナら来ると思つんだ」

「わかつた、上手くいけば電話をしづ。ああ、俺らも動ひつか・・・」

「んじや、またね」

クロロと話し終えて、ウボオーラ迎えに行つたらノブナガが話しかけてきた。

「プラチナ、あいつのこと頼むわ」

「まかしといて」

ノブナガに微笑み、ウボオーラ迎えに行くために屋上に向かう。方角をクーちゃんに聞いて、その方角に向かって精神を集中する。

・

『ちくしょー、もつ一回戦えれば勝てるのよー。へつそー 鎖野郎！！ ぶつ殺してやる！！』

やつぱり・・・ まだ、自分の遺体の近くにいるみたい。間に合  
うね。クーちゃんを腕に抱いてから銀翼を出し、空高く飛びあがり、  
ウボオーの声が聞こえる場所へ急いで向かう。

プラチナが飛んでいく軌跡には、銀色に輝き、まるで流れ星が流  
れた様になっていた。

ウボオーは遺体のそばで、戦いのショミーレーションをしていた。

『「おりや！ セいや！ はああ————！」』

遺体の横に降り立ち、クーを地面に下ろす。1人と1匹は戦う姿  
を見ていたが、いつまでも気付かないでの声をかけることにする。

「ウボオー、クーちゃんとお迎えにきましたよ～～」

「にゅうにゅ～（おむかえですよ～）」

『「んんん！？ プラチナとクーの声が聞こえるな・・・』

見当違いの方向を向いて、考えるウボオーギン。溜息をついたプラチナは、ちつちつな晶石を投げて気付かせた。クーは、ウボオーギンの足に手をつき、爪を立てた。

『「ゴン！！ メリッ！！」

『「いつて————！」』

『「お久しごり～ 元氣？」』

「にやう（ウボオ）」

『お前らな！ オレは死んでも元気だぜ！ そういうやなくて、何で話できんだよ！？』

『そういう能力なの。ウボオーは、まだ生きたい？』

『もちろん！ 生きれるんなら、まだまだ暴れたいね！』

「それじゃーね・・・カクカクシカジカ」

ウボオーギンに、私の能力に付いて話す。クーちゃんが本当はもう死んでいて私の能力で生きていることや、ウボオーも望めば一緒に生きる事が出来ること、もし一緒に生きる場合、念能力はそのままでもう一度死んだ場合はエインフェリアなので、私が死なない限り生き返られる事を伝える。

「どうする？ 私と一緒に生きる？」

『おう！ プラチナにクー、これから頼むぜ！』

「にやー（いっしょだよー）」

「それじゃ、じつとしててね」

クーちゃんの時のようになり、銀翼から輝く羽がウボオーギンと遺体を包み込み、光の粒となってプラチナへと吸い込まれていった。光の粒が全て吸い込まれると『ヴァルキリー』がプラチナの手の上に出てきた。キャラ一覧には、ウボオーギンが新しく加わっていた。

「よかつた、ちゃんといるね」

「にやー（よかつたねー）」

「上手くいったから、クロロに電話しないとね」

プラチナは電話を取り出し、クロロに成功した事を伝える。すると、クロロから指示が出た。オーラクション会場のホテルまで、派手にマフィアを殺しながら行くこと。ウボオーはまだ出さないこと。

容姿は、初めにオークション会場を襲撃した時の容姿で来る」と。  
「どうやらマフィアによって顔写真を公表され、懸賞金をかけられて  
いるらしい。

指示を実行するために『ヴァルキリー』でレナスからラウリイに  
設定を変更し、クーちゃんと一緒に移動をはじめる。

町に入つてからはクロロの言つた通り、マフィアに顔がばれてい  
るようで狙わればじめた。マフィアらしい人を片つ端から殺してい  
く。弓で顔・胸・足・手を同時に狙い撃つ。ビルからビルへ飛び移  
りながら、殺していく。遠距離からの攻撃は、弾け飛ぶ瞬間がいま  
いちよく見えないのが残念だね。

オークション会場のホテルに到着。

ホテルに侵入し、クロロを探しあげると上方の階で気配を感じた。クロロがいるはずの広間に入っていくと、クロロが窓を開けて指揮者のように指揮を振っていた。楽器はマフィアの悲鳴？  
？絶？をやめて、クロロに話しかける。

「誰への演奏曲かな？」

「ふふふ、ウボオーさんにだよ。彼は喜んでくれるだらうか  
「照れるんじゃない？」そんな気がする」

「いや～（てれてる～）」

「そうかもな・・・お客さんが来たよっだ」

ギイイ・・・・・・　パタン

お髭が素敵なおじいちゃんと、銀色の長髪が似合つてゐるおじさん  
が登場。殺る気満々だね・・・  
まあ、2対2+1匹でどう戦つかな？

第20話 9月3日 ? (後書き)

ゼノ・シルバとの戦闘シーン……書けるかな?  
頑張りますが、あまり期待しないで～～

これからもよろしくです。

殺氣で部屋が満ちている。

「プラチナ、気をつけるよ」

クロロが声をかけてくれるたけど、本当にヤバイ感じだね。4人で睨み合っていると、シルバがゼノに話しかけた。

「親父、気をつける。あの男は他人の能力を奪う」

「・・・」

先手必勝！！ プラチナは考えていた。

遠距離タイプの今、接近戦は不利。勝負をするならば、離れている今しかない。

(クーちゃん、サポートよろしく)  
(まかせて)

プラチナはクーと念話で打ち合わせをし、2人の隙をうかがう。まるつきり隙が無い。一人同時に狙い撃つのが無理ならば、隙をつくつて大きい方を狙うのが一番。クロロに目配せをし、お互いのターゲットの確認をする。

(クーちゃん、2人が離れるように間に攻撃してちょうどいい)  
(りょーかい)

クーちゃんが、クロロと私の前に出てくる。

敵の2人は、前に出てきた黒猫を不思議そうに観察していると、黒猫は飛びあがり念での攻撃を始めた。

「『』や――（浄化してあげるわ、神技！　エーテルストライク！　！）」

「なに！？」

ドゴオオオオ――ンン――――

クーの攻撃により、一二手に分かれて戦う事になった。

ゼノはちゃんとクロロのどこに行つたね。さあ、シルバが接近していく前に攻撃しないと殺られそう。田つきが怖いですってば。

「神の名のもとで、奥義！　レイヤーストーム！――

プラチナの念で強化された約50本の矢が、シルバを追撃していく。

今の中止に設定の変更をしなければ、プラチナに勝機はない。『ヴァルキリー』を出し、クーの設定を変更。接近戦を得意とするブルムス（不死者の王）にし、プラチナが設定を変更する時間を稼いでもらう。

シルバは雰囲気が突然変わった黒猫を警戒した。

黒猫からは、先ほどまで感じられなかつたオーラが出ている。プラチナと呼ばれた者が本を出してから変化した。あの本に何か秘密があるな。

シルバがプラチナに近づくとすると、黒猫が邪魔をしてきた。

「にゃんにゃう――（プラチナには近づいたらダメ――）」

「念字が出来るのか。変わった猫だ」

「にゅうにゅー！（ボクは猫じゃなくてクーだもん！）」

「クーという名前があるのか・・・ふん、聞いたことがあるな」

「にゅう？（クーのことは？）」

「そうだ」

不思議な猫に、プラチナといつ名前。イルミが言っていた不思議な念能力を使う少女と猫とは、この2人のことだったのだな。楽しめそうではないか。

シルバが笑ってる？さつきよりも殺気が緩んでいる。クーちゃんと何を話したのか気になるけど、今がチャンス。出したままの『ヴァルキリー』でレナス（アース神族）に設定を変更し、ウボォーの召喚を行う。

「死の、先を逝く者たちよ！」

銀翼が出現し、翼から出た光の粒が人の形を形成し、ウボオーギンが召喚された。

前世のままの姿で現れたウボオーギンは、周囲の状況を確認すると喜びをあらわにした。

「プラチナ！ 暴れていいんだな！..」

「もちろん、全力でお願い」

「おおお！..」

「クーちゃん、下がつていいよ！」

クーが下がると、ウボオーとシルバの戦いが始った。お互いに一步も引かず、打撃を入れ合つ。

プラチナはクーと共にさらに下がり、ウボオーにシルバを任せ、

クロロの様子をうかがう。

クロロは苦戦していた。ゼノを生け捕りにしようと『盗賊の極意』スキルハンターを駆使して、アーヴィングの攻撃を躊躇なく受け止めていた。

かのソインを田代に譲ってしまった

この爺さん強いね。生け捕りは無理か・・・それでも、  
ラチナは大丈夫か？

クロロの視線がプラチナ達の方に一瞬それた隙を、ゼノは見逃さなかつた。

急接近し、  
ヶ口口を壁に追い込み拳を叩き込んだ。

「シルバー！！  
ワシごと殺れーー！」

۱۰۷

「團長！」

シルバがウボオ一投げ飛ばし、ゼノもろともクロロに特大の念を入めた拳を振り下ろした。

ものすごい音が響き、クロロ達がいた場所は床が抜け、階下は煙が充満していた。

ウボオー、プラチナ、クーが慌てて大穴から下を覗き込んだその時、電子音が聞こえた。

ゾルティック家専用無線機が鳴っている。これが鳴るのは暗殺完了の時のみ。

シルバが無線に出て話をしている。

「イルミか」

『うん。オレの依頼人は?』

「ここにいる」

『それじゃあ?十老頭は始末した、約束の口座に入金よろしく?つて伝えといて』

「わかつた?お前が話してたプラチナがいるぞ」

『そうなんだ!今から行くつて伝えといて』

「ああ」

シルバが話しているうちに、クロロとゼノが瓦礫の中から出でてきていた。

お互に命拾いしたな、と話している。どうやら、手加減をして戦っていたようだ。

「団長、大丈夫か」

「問題ない」

「ビックリするじゃねえーか!」

「いや~(心配した~)」

戦いは、クロロがターゲットではなくなったので終わつたようだ。上から様子を見ていたプラチナは『ヴァルキリー』から?ノーブル・エリクサー?を出し、階下の皆を対象に使用した。

クロロ、ウボオーはもちろんのこと、シルバやゼノまで全回復していく。

階下に飛び降りたプラチナは、皆の状態を確認する。

「回復しましたか？」

「すごい能力じゃの」

「プラチナ、イルミが会いに来るそうだ」

「イルミもワーカシンにいるんだ？」

偶然もあるんだと考えていたが、クロロが依頼していたことを説明し、ゼノの補足から何となく理解することが出来たプラチナ。クーとじやれていると、イルミがやつて着たようだ。

「やあ、プラチナ。元気にしてたかい？」

「お久しごり、元気にしてたよ」

「いやー（げんきー）」

イルミはプラチナに抱きつき、クーがイルミの頭に乗っかり和む。思つ存分和んでいると、イルミが懐からファイナンシエを出してプラチナに渡した。

どうやら、ゴトーからのプレゼントらしい。袋には？いつでもお越しください？と書いてあり、ゼノとシルバも歓迎すると頷いてくれた。

また今度遊びに行く約束をし、ゾルティック家の皆さんとお別れをした。

ゴトーさんつて優しいな。イルミも好きだし今度絶対に遊びに行こうっと。

遊びに行くには、クロロを説得しないといけないので大変そうだ。

遊びに行くことを考えていたら、クロロが話しかけてきた。

「プラチナ、ウボオーで皆を驚かすのだろう？ なおしておけよ」

「は～い、ウボオー次は宴会の時に呼ぶからね～」  
「おおつ、団長・プラチナ・クーまた後でな～！」

「にゅう～（またあとで～）」

ウボオーを返した後、クロロが旅団に指示を出し、フュイクの旅団全員の死体を用意させ、オークションを開催することになった。シャルナークが司会をし、パクノダが商品を運ぶお姉さんをし、コルトピが商品の「ヒュー」をする。他の旅団は、箱から順番に商品を出したり、包んだりと忙しく動いた。

プラチナもお手伝いをしていたが、クーが呼ぶので行つてみると  
？緋の眼？があつた。

私もクルタ族、？緋の眼？は同族の人たちの遺品だが、私を殺そ  
うとした一族に何の気持ちもわいてこない。一応、誰がいくらで落  
札していくのかは見ておこうかと思つ。

クーちゃんと会場の様子を見ていると、？緋の眼？は29億で落  
札された。しかも、あの姿はクラピカのような気がする。商品の受  
け渡しの時に確認すると、間違いなくクラピカだった。ハンター試  
験の時にクラピカが言つていた事を思いだした。同胞の眼を取り戻  
す・・・ 有言実行だね。

感心して見送つていると、クーが話しかけてきた。

「にゅうにゅ～（あいつ、ウボオーころしたやつだよ～）」「  
・・・・・・マジで？」

「にゅ（マジで）」

「おかしいよ、だつて半年前まで念知らなかつた奴だよ～？ とり  
あえず、クロロにだけは知らせないと・・・

オークションが無事に終わり、アジトで宴会をしていると、クロがプラチナに声をかけてきた。

「プラチナ、サプライズをするんだろう？」

1

「いや～いやお（こねからサプライズシヨーだよ）」

『ガーリギー』でレナスに設定変更して、ウボオーを召喚すると部屋の空気が止まった。

ハスナガ ブエイタン ブランケットは酒が入った二ツ瓶を落とし  
ヒソカが携帯を落とし、マチは口が開きっぱなしになつた。

גַּמְלָן

「…………」

۷۰

ラヂオ・マガジン

あつちにこつちに、移動するウボオー。皆に酒を飲まれ、陽気になっていく。

なセウボオーがいるのかは、ケ□□からみんなに説明してもらいま  
ラチナは離れたところで、クーとケーキを食べている。

結局大騒ぎになりすぎ、クロロにクラピカの事を話すきっかけが

なく、明日伝えることに。

タヒトニハシナカニシテ、  
タヒトニハシナカニシテ、  
タヒトニハシナカニシテ、

九三  
九

気持ち分からなくもないけど、ウボオーを殺したのは許せない。  
どうしてくれようか・・・クロロの判断に任せよう。

第21話 9月3日 ? (後書き)

グダグダになつてきちゃいました・・・  
クラピカ達は、原作通りにしたいと思つてます。

すこし、間があきそうです。  
これからもよろしくお願ひります!  
見捨てないで〜〜

昨晩の大騒ぎが終わり、皆が起きて集まつたのは昼だった。

クロロが今夜にはアジトを出てホームに戻ると言つた。それを聞いたノブナガは納得できず、抗議をするが、クロロは返答せず、ノブナガに生年月日・血液型・名前を聞き紙に書くように指示した。

ノブナガは困惑しながらも渡された紙に記入し、団長に渡す。クロロは、ネオンの念能力を使い、自動書記による予知を書き記した。占いには、来週5人の団員が死ぬことがでていた。占いの詩を声をあげて読みあげると、シズクがクロロに自分を占つて欲しいと声をかけた。占いの結果、来週死ぬのは自分だと話した。

クロロは自分とノブナガの占いを解説し、今週中にホームへ戻り鎮野郎と戦わなければ蜘蛛が半分になる事はないと言つた。もし残れば、シズク・シャル・パクノダは確実に死ぬ。ウボオーやノブナガは特攻だ、死ぬことも仕事の一つ・・・ノブナガは話を聞いて納得した。

残りのメンバーも占つことになつた。シズクのように危険回避の助言が出ているかもしれないのに、団員に生年月日・血液型・名前を記入するよう声をかけるが、フィンクス・フェイタン・コルトピは情報不足で占つ事が出来なかつた。

「・・・・・」

「どんな占いが出たの？ 見せて」

「やめた方がいいと思うよ？ 見たら驚くからね」

「いいから」

パクノダがヒソカに声をかけ、占いを見せてもらつた。驚いたパクノダは他の団員にも見るように勧め、渡した。占いを読んだ団員は驚き、特にノブナガは怒りに震えていた。

「てめえがウボオーを売ったのか！」

「まあ、待ちなよ。団長が行動によつては回避も出来るつて言つてたじやないか」

「ちつ・・・ どうなんだ！？」

聞かれたヒソカは、言えない？ でも、一つ目の詩は事実だけど？ と話した。なぜ、言えないのかシャルナーグが聞くと、言わないとんじやなくて言えない？ これで納得できないならボクも自分を守るために戦うよ・・・ ノブナガは怒つて斬りかかるが、クロロに止められ話を聞くことになった。

鎌野郎が最低でも二つの能力を有する敵だとつこと。一つ目はウボオーを捕えた時の能力、もう一つはヒソカの言動を縛る能力。おそらく後者は相手に何らかのルールを強いることが出来る・・・ クロロの話をシャルナーグがまとめ、鎌野郎は具現化系か操作系ではないかと予測された。

ヒソカの占いには、蜘蛛がホームに戻れば団員が半分死ぬと予言が出ていた。

「半分まであと一人・・・ 他に死の予言が出ていたものはいないか？」

「情報不足のオレかフェイタンかコルトピの誰か一人だな」

フィンクスがクロロにそう話しかけた。

ヒソカと自分の予言を考え、クロロはアジトに残る事を決断。鎖野郎と戦ったウボオーをプラチナに召喚してもらい、詳しく話を聞きたいとプラチナに言った。すると、プラチナが答えた。

「鎖野郎の名前知ってるよ。緋の眼の奴でウボオーに復讐した奴・・・ クーも間違いないって教えてくれたしね。昨日の会場にも来てた。」

「お前知ったのかよ!! 何で言わねえんだ!!」  
「でもそいつ、半年程前のハンター試験一緒だつたけど、念知らなかつたんだよ? ウボオーを殺して復讐したのがそいつって思わなかつたんだもん・・・」

ノブナガが言いよつて来ることに、言い訳をしながら後ずさると、パクノダが間に入り落ち着かせた。

「名前は、クラピカ。クルタ族で金髪美人、オークションで? 緋の眼? を落札してたよ  
「コルトピー、ゴピー商品の場所がわかるか?」  
「ボクのゴピーは? 円? の役割もするからわかるよ。本物を触れればだけね」

団員全員で? 緋の眼? を段ボールの山の中から探し出し、コルトピーに渡す。

「あっちの方角に・・・ 2500m 同じのがある。ゴピーは一日で消えるから急いだ方がいいよ。昨日の夜にゴピーしたから、あと数時間で消えるから」  
「地図はあるか?」

クロロは地図を見て、該当するホテルをつきとめた。ホテルベー

チタクル・・・

鎮野郎を殺すため、班を決めて行動することに。フィンクス・フレイタン・シャルナーク・ヒソカ・ボノレノフ・フランクリンは待機。シズク・パクノダ・マチ・プラチナ・コルトピ・パクノダはクロロと一緒に行動することになった。

行動開始をしようとした時、マチがクロロに話しかけた。

「団長、子どもがこの場所を知ってるんだ。鎮野郎とは関係なかつたけど、気になるんだ・・・」

「子ども?」

「ああ!! 忘れてた!! 団長、そいつの入団を進めるぜ!!」

「ちょっと、そんなつもりで話したんじゃないよ!!」

「?」

ノブナガは尾行してきた子ども2人について腕相撲した時のこと、逃げられた時のことを話し入団を強く勧めた。話を聞く限りその子どもは入団しないのでは? とクロロは言つたが、ノブナガは説得するから一度見てくれと言い募り、保留することになった。

マチはなんとなく勘で気になると言つた。クロロはマチの勘は当たるので、コルトピにアジトのダミーを増やすように指示をした。コルトピがダミーを50棟増やし、どれか一つにでも誰かが侵入したらすぐわかると話した。

鎮野郎の目的・居場所も判明し動き始めるなか、プラチナは自分の占いが気になりクロロに話しかけた。占い内容を見せる。

大切な暦が一部欠けて  
遺された月達は盛大に葬うだろう

霜月は死の先を逝き  
女神の迎えを待ちわびる

死神に顔を見せてはいけない  
暦がさらに欠けてしまつから  
黒を追いかけなさい  
緋の眼から蜘蛛を逃がせるだらう

気持ちを新たにし  
逆十字と共にに行くのがいい  
奇術師が遊びに来て貴を誘う  
楽しめば楽しむほど良い事がある

クロロは占いを見た後、フードをかぶつて顔を隠すようにし、クーが何処にいてもわかるかと聞いてきた。レナスの時ならばわかると答えると、設定を変更してから出発することになった。

クロロは団員へ、プラチナとクーが蜘蛛が生きるための鍵になるとし、行動を止めるなと言った。団員は了解し、行動を開始した。

クラピカは占いによると死なない。けど、クーちゃんを見失うと蜘蛛の誰かが死んでしまう。皆は家族みたいなもの・・・頑張ろうと気を引き締めたプラチナはクーちゃんを肩に乗せ、クロロ達の後を歩いて行つた。

第22話 9月4日 ?（後書き）

・・・あまり進まなかつたです。

次回は、キルアとゴンが登場する予定です。

感想ありがとうございました！

これからもなるべく、キャラを大切にしていきます――

ホテルに行くには電車に乗る必要があるので、駅に向かった。

プラチナはウボオーに買つてもらつた最後のクッキーを食べながら電車に揺られる。すぐに目的の駅に着き、電車を降りた。シズクが地図を見ながら進む方向を言う。集団で歩いていると、コルトピがコピーの？緋の眼？が上から下へエレベーターで移動を始めたことに気付いた。

クロロの合図で走つて追いかける。その間にも動きを探つていたコルトピは？緋の眼？が車で移動していると、移動している方角を指で指示しながら団長に伝えた。

プラチナの肩に乗つているクーがクロロに向かつて鳴いた。クロロは頷き、尾行されていることを団員に伝え、車をノブナガ・パクノダ・コルトピ・プラチナが追いかけ、マチ・シズクはクロロと尾行している者を相手することにした。クロロの合図で分かれた。

コルトピの誘導で車に追ついた。乗つっていたのは黒髪の男と犬だった。

「ハズレ~ クラピカじゃなかつたね」  
「居場所でも答えてもらおうかしら？」  
「動いたら、殺すからな」  
「俺は何も知らないんだ!!」

ノブナガが動いたら殺すつて言つたのにね・・・

首を切られて死んだ男を見ていたら、パクノダが念能力で情報を

伝えた。分かつた事は、娘のボディーガードだつたこと、センリツという心音から心理状態がわる仲間がいること、何処にいるのかは知らないといことが分かつた。

ホテルに戻り、クロロと合流することになった。

ホテルで合流すると、子どもが2人増えていた。

「おお！… お前らまた尾行失敗したのか！？ これも何かの縁だ、入団しろよ」

「嫌だね！ 誰が入団するもんか！？」

「オレも嫌だね！ フン！？」

2人は眼をつむりそっぽを向いた。ノブナガはクロロにも子どもの良さを勧めえるが、クロロはパクノダに何を隠しているのか聞くよう指示した。プラチナは2人の前に立ち、クラピカの友達のキルアとゴンだと教えた。

「友達か・・・なおさら何か知つているだろう」

「そうね、坊や教えてちょうどい。何を隠しているの」

「（何で名前がばれてるんだ！？）」

パクノダが質問したその瞬間、ホテルの電気が消えた。キルアがマチの糸から抜け出してパクノダの腕を折り、マチの脇腹を蹴り飛ばした。ゴンはパクノダの顔を蹴り上げ、逃げようとした時にマチに引っ張られた。キルアがゴンを自由にするためにマチを殺そうとした時、プラチナが間に入りキルアの腕を掴んで後ろにひねり床に押さえつけた。ゴンはキルアを助けようとしたが、ノブナガに足を掴まれ動けなくなってしまった。

気が付くと、団長・クーがいなくなっていた・・・

柱にナイフが刺さり手紙が付いていた。ノブナガが読み、パクノダに渡した。内容は？2人の記憶、話せば殺す？だった。ノブナガは考え込むパクノダに「お前は一言も話すな」と言い、マチに2人をしつかり糸で縛り自分が持つてフィンクス達を待つと言った。

ノブナガはフィンクスに電話をし、団長が連れ去られたから早く来いと伝えた。

フィンクス・フェイタン・シャルナークが到着した。反省会をしているとフィンクスの電話に団長から着信が入った。パクノダに変わり内容は、追いかけるな、人質に危害を加えるな、1人で空港に来ることだった。パクノダは1人で行動し、他の団員はアジトに人質を連れていくことにした。

人質をシャルナークが逃がさないように歩いている。プラチナは最後尾を歩いているコルトピに近づき、クーを追いかけるから皆によろしくと伝えてグループから離れた。

皆を見送りある程度離れてから、プラチナは銀翼を出し空に飛びあがつた。

クーの気配を追つていくと、飛行船が航行していた。入口を探して入ると、クーからの念話が届いた。

『プラチナーッ クロロが鎖刺されてパクにも刺そうとしてるの！　急いで！！　ぎやあ！！』

プラチナがドアを開けて駆け込むと、クラピカがパクノダを鎖で

刺そうとしていた。腰に装備していたナイフを念で強化して投げ飛ばし、鎖を弾き返した。クーは壁に叩きつけられたようで倒れていった。

プラチナはパクノダの前に立ち？エリクサー？をクーに使い回復させた。クーは起き上りプラチナに近づいて行く。プラチナは肩に飛び乗ってきたクーを撫で、クラピカを威嚇しないよう落ち着かせながらクラピカに話しかける。

「クラピカ、どういふこと？」

「君は、プラチナか・・・なぜ邪魔をする！？」

クラピカと会話をしながら、今まで何があつたのか念話でクーから話を聞いた。クロロの心臓には？律する小指ジャッジメントチューイングの鎖？が刺され、守らなければならぬ約束は2つ。1つは今後念能力の使用を一切禁じること、2つは今後旅団人との一切の接触を断つことだった。パクノダには1つ午後0時までにゴンとキルアを小細工をせず無事に解放すること、2つクラピカについて一切話さないこと、この2つの約束で刺そうとしていたようだ・・・間に合つてよかつた。

「プラチナ、私は良いの。だから皆のところへ戻つてちょうだい」「良くない！！ クラピカとは私が話をつけるから、パクは黙つて！！」

「君は旅団をかばうのか！？ クルタ族はこいつらに虐殺されたんだぞ！！」

「・・・・でも、泉に捨てられた私を育ててくれたのは団員皆よ。どうしても復讐するのなら、私は貴方を許さない。皆は私が守るんだから！」

話を聞いていたセンリツがクラピカに向かつて、「彼女は嘘を付い

てないわ、本気よ」と話した。

クラピカはプラチナから視線をそらし、クロロを睨みながら考え込み、プラチナに話しかけた。

「・・・君が私のことを旅団に話さず、ゴンとキルアを小細工をせず無事に解放するなら私も人質を解放しよう。約束は守れるか！？」

「もちろんよ」

「念の為、パクノダに？ジャッジメントチーン律する小指の鎖？を刺す。もし、君が約束を破ればパクノダの心臓は潰れて死ぬだろう。約束を守つたなら、人質交換後に鎖をはずそう」

「・・・分かったわ、パクもそれでいい？」

「OKよ」

クラピカはパクノダに鎖をうつた。人質交換はゴン・キルアだけを連れてくること、旅団は連れて来てはいけない、何処へ行くかも話してはいけない。飛行船が空港に戻り、プラチナがクーにクロロのことをお願いすると、クーはクロロの肩に乗り降りて行くプラチナとパクノダを見送った。

アジトに付いた2人は団員、特にフィンクスとフェイタンの説得が大変だった。クラピカの確認の電話も入った。なんとか納得してもらい、ゴン・キルアを連れて4人で空港に向かった。

空港に到着。乗り込もうとした時、ヒソカがやつて來た。ヒソカはクラピカに電話し、一緒に乗り込むことになった。何か事情があるようだ。

目的地に到着し、人質を連れて降りるとクラピカから電話が入った。キルアに渡すと携帯を胸に当て、センリツに心音を聞かせて異常が無いか確認が終わり、人質を交換することになった。

ゴン・キルアはクラピカ達の方へ歩き、クロロがプラチナ達の方へ歩いてくる。人質交換が無事に終わり、クラピカはパクノダの鎖を解除し飛行船に乗つて帰つて行つた。

クラピカは飛行船に乗り込む前、プラチナに何か言いたそうにしていたが結局何の言わなかつた。

複雑な気持ちは、何となくわかるけどね・・・

パクノダはクロロに何も言わず、飛行船へと歩いて行く。プラチナが追いかけ話しかけた。

「パク、私クロロと一緒に行くね。皆によろしく言つといで」

「にやうんにや〜（また あそぼうね〜）」

「わかつたわ、ちゃんと団長の言つ事聞くのよ。お腹出して寝ないのよ？ ケーキばっかり食べないのよ？ 後で皆に電話しどきなさいよ？」

「は〜い、いつきます！」

「いつてらつしゃい」

プラチナがクロロの所へ行こうとするが、ヒンカが半裸で近づいて話しかけてきた。

「やあ？ クロロ念が使えなくなつたんだね？ せつかく旅団をやめて戦おうと思つたのに残念？」

「旅団抜けたの？」

「もとから入つてなかつたのさ？」

「え！？ そなんだ」「

「クロロと行くのかい？」

「行くよ」

「それじゃ、またね？」

「うん、ばいばい！」

ヒソカが飛行船に乗り込むと、飛行船はゅくくじと飛んで戻つて行つた。

プラチナがクロロとクーに近づくと、クーが肩に飛び乗つて来た。クーを撫でながらこれからどうするのかクロロに聞いた。

「オレの占いには？東に行くと……?とあった」

「んじゃ東に行くの？」

「まずはこの岩山から降りよつか・・・」

「レッジゴー――

「いやういや――――（れつづら）――――」

プラチナとクーはクロロの後を追いかけ、東に向かつて旅をすることとなつた。

第23話 9月4日 ?（後書き）

矛盾してるかもしません。

パクノダが原作通りじゃなく、死なせないことにしました。  
納得できない人もいると思うけど、許して――――

次回は、番外編もしくはグリードアイランドに突入したいと思いま  
す。

第24話 東に行わんよ（前書き）

プラチナ暴走中・・・

## 第24話 東に行きましょう

ヨークシンに戻つて来たクロロとプラチナ・クーは、ホテルで一泊した。

プラチナとクーは出発前にクッキーを買い溜めし、クロロと一緒に東行きの飛行船に乗り込んだ。

「何読んでんの？」

「不思議の国のアリス」

「…………へ？」

「ははっ、『冗談だ』」

到着するまでクロロは読書をし、プラチナとクーは探検をしたりクッキーを食べたりして過ごした。飛行船が目的地に到着。クロロとプラチナは手をつないで飛行船を降りた。

宿泊するホテルを決めた後、晩ご飯の時間まで街を見てまわる事にした。

まずは最初に見つけた古書屋に入った。気に入る本があったようで、4冊購入。プラチナとクーはケーキ屋さんでケーキを食べたが・

・ヨークシンのケーキ屋さんが美味しかった。

レストランで晩ご飯を食べてからホテルに戻つた。

シャワータイムです!! そこのお兄さんお姉さん、お湯も滴るいい男を見に行きたいと思います!

スツ・・・スツ・・・ 忍び足で浴室を目指します。

あと少し・・・・・・ それでは、ドアを開けます。 カチャ・・・

ザアアアア―――― ターゲットのシルエットが――――

(プラチナ、鼻血が出てるよ・・・)

「鼻血などどうでもいい!! いざ行かん!! クロロが私を待てる――――――――――

「クロロ~ 一緒に入っていあばあぶばああ――――――――――」  
「お前も変態だつたか・・・ クーはおいで、久しぶりに洗つてあげよう!」

「任務失敗・・・ お風呂の扉を開いたとたん、シャワーが顔面にかかりあまりの熱さに転がつて悶えていると無情にも変態の烙印を押されてしまった・・・・・ なぜばれた!? 私は何処で失敗したのだ!? 絶は完璧のはずだ・・・・・ 次こそは、次こそは――――――――遂行してみせる!! こうなれば修行あるのみ!!」

プラチナの変なスイッチが入っていたその頃、クーはクロロに身体を洗つてもらい一緒に湯船に浸かつて寛いでいましたとさ・・・

クロロがクーを抱えてお風呂からあがってきた後プラチナは、次に変な事をしたならば甘い食べ物を禁止にすると宣言され、計画を中止せざるを得なくなつたようだ。

次の朝、さらに東を目指して2人と1匹は列車に乗り込んだ。

プラチナからお兄さんお姉さんへ？

シリエットでの腰のくびれが素敵でした。気配の消し方をより高度なものへと進化させ、再度挑戦したいと思います。成功した時は報告しますので、お楽しみに！！！

懲りないプラチナにクロロの鉄槌がくだる日はそつ遠くないようだ。

## 第24話 東に行きましょ♪（後書き）

前話の誤字を教えてくれて、ありがとうございました！  
これからも、誤字を発見して教えもらえたなら嬉しいです。

次回は、ヒソカが出る予定です。

## 第25話 ゲームをしましょ

列車から降りたプラチナ達は、港町に到着。ここから東に行くには船が必要だと分かり、停泊しているクルーザーを盗むことにした。

クロロが運転するクルーザーで東を目指した。一日目の朝に島が見えた。船を近づけ、島には泳いで上陸。

びしょびしょなんですけど・・・

「プラチナ、おいて行くぞ」

「気持ち悪い〜〜」

「我慢しろ」

「にゃんにゃ〜（がんばつて〜）」

プラチナがクロロに追いつくと、男性が前方にあらわれて話しかけてきた。

「侵入者がきたのは久しぶりだね」

プラチナは、念が使えないクロロを守るように前に出て、クーをクロロの肩に乗せた。

「・・・何?」

「一応聞くが君たちは漂流者なのかな? 潮流の関係で波まかせでは絶対に着けない島だがな」

「それで?」

「私はレイザー、このゲームの製作者の一人だ。侵入者には退場し

てもらおう、正しく入島するなら歓迎するよ　？  
「クーちゃん！」

？<sup>エリミネイト</sup> 排除？<sup>グリードアイランド</sup> G・Iに不当な方法で侵入した者すべてをアイジエン  
大陸のどこかに飛ばすガード

プラチナがクーに声をかけた瞬間、クーはクロロにしがみつき一緒に飛ばされた。プラチナはクロロ達とは別に飛ばされてしまった。

「子どもなのに強そうだ・・・」

レイザーは念弾で、クロロ達が乗ってきたクルーザーを爆破して片づけた。

アイジエン大陸に飛ばされたプラチナは、すぐにクロロに電話をした。

「なんだ・・・」  
「なんだじゃない！！ クーちゃんも大丈夫？ どこに飛んだの？」  
「飛行船で行つた街のホテルで合流だ・・・にやつあー（はやくきてね！）」  
「わかった、すぐ行くね」

プラチナは電車で空港に向かい、いそいで街をめざした。

次の日の朝、次に、ホテルに到着。

ロビーからクロロに連絡をすると、7044号室の前にきて、ドアをノックしようとした時、内側からドアが開いた。

7044号室の前にきて、ドアをノックしようとした時、内側からドアが開いた。

「やあ？ やっぱりプラチナだ？」

「……！」

出た――――――――――――――

ヒソカは、驚くプラチナの背を押して、部屋に招き入れた。部屋の中では、ソファーに座るクロロの膝でくつろぐクーに、マイペースに読書をするクロロがいた。

プラチナはヒソカと一緒に、クロロの向かい側のソファーに座る。

「ケーキでも食べるかい？」

「うん、食べるけど…………何でヒソカがいるの？」

「……依頼したからだ」

「そう、ボクは仕事できたんだよ？」

「へえ、そうなんだ」

ヒソカが、ルームサービスで注文をしたアフタヌーンティーセットがきた。

クロロの膝でくつろいでいたクーが起きて、プラチナに声をかけた。

「ヒヤウヒヤーン（ボクもたべたーい）」「  
はーはー、元気そうでよかったです。心配したんだからね」「  
ヒヤウヒヤー（だいじょうぶだったよー）」

「んじゃ、食べよっか？」  
「にゃー（たべるー）」

クーは、クロロの膝からプラチナの膝に引っ越しして、一緒に食べはじめた。

ケーキやスコーンを食べおわると、クロロが本を閉じ、調べてわかつた事を話しだした。

あの島は、G・I<sup>グリードアイランズ</sup>というゲームが行われている島だということ。ゲームを製作したのは念能力者で、ゲームで遊べるのも念能力者のみ。クロロの占いにていた、東にいる待ち人は、ゲームに参加している可能性が高いこと。しかし、念が使えないでのヒソカに依頼をした。成功報酬は、除念後に戦うこと。

「除念？」

「かけられた念を、はずせる能力のことだ」

「はずせるのー!?」

「当り前だらう・・・ヒソカにはG・I<sup>グリードアイランズ</sup>で除念者を探し出して連れてきてもらう」

「よかつたー！ ヒソカ頑張つてね～」

「プラチナも行くんだよ？」

「へ！」

「1人より、2人の方が早く見つけられるからね？」

こうして、プラチナはヒソカと一緒に、G・I<sup>グリードアイランズ</sup>をプレイすることになった。

「準備はできるから、すぐに始めるかい？」  
「あの島に行くの？」

プラチナが島に行くのかヒソカに聞くと、ゲーム機に念をして手

をかざすと、島に飛んでいけると教えてくれた。まず、見本として先にヒソカが行くことになった。

「それじゃ、向こうで待つてるよ？」

「うん、待つてね」

ヒソカが、ゲーム機に念をして手をかざすと消えた。

おお～～～ 本当に消えた！！

ヒソカが消えた事にプラチナが驚いていると、クロロが声をかけてきた。

「プラチナ、クーは本に一度戻して、向こうに着いてから出せ」

「はーい、クーちゃんまた後でね」

「・・・お前の占いに？楽しめば楽しむほど良い事がある？とあつただらり？ 楽しんでこー」

「そうする！ それじゃ、行つてきます」

「ああ、気をつけるよ。変態とかにな」

プラチナも消えた部屋で、クロロは一人静かに、本の続きを読むことにした。

変態のことは気になるが、プラチナなら大丈夫だろう・・・

## 第25話 ゲームをしましょ（後書き）

グリードアイランドに突入しました。

次回は、ヒソカと遊んでいる様子を書く予定です。

これからも、よろしくです。

第26話 G・I ヒソカと蜘蛛（前書き）

遅くなりました～

## 第26話 G・I ヒソカと蜘蛛

プラチナはヒソカと共に、G・I シンの木に到着してすぐに、『ヴァルキリー』からクーを召喚して定位位置の頭にのつけた。

遠く離れた場所から2人を観察する気配があしよせる。

プラチナが周囲を見回し、視線を感じる方向を睨んでいると、ヒソカがプラチナに話しかけた。

「とりあえず、街を目指そうね？」

「はーい・・・・・・・ 視線がうつとうつ……！」

「にゃんあ（ほつとひづよ）」

「その通り？」

「・・・・・・・ ぶう！」

ヒソカは、ぶうたれるプラチナの口にアメ玉を入れて、街を目指して歩き始めた。

ヒソカって優しいよね～ いちじアメ大好き

プラチナが「機嫌で歩いていると、魔法都市マサドラに着いた。

「ここで、旅団の誰かが来るのを待つとするよ？」

「・・・・・・ なんで？」

「ボク達がここに来た理由は、クロロの為に除念師を探すことじよ？」

「・・・だから？」

「彼らも探しにG・Iに来るはすだからね？ 協力すれば見つけやすいだろ？」

「！でも、待たずに電話すればいいんじゃない？」

「それじゃ、面白くなによ?」

「そうこつもん?」

「わづこつもん?」

旅団が来るまで、魔法都市マサドニアで待つことになった。

「暇……！」

プラチナが大きな声で叫んだ。  
初めのころは、食べ歩いたり、街を探検して遊んでいたが、飽きてしまったようだ。

「じゃあ、狩りでもしてカードを集めのかい?」

「やだー めんどくさいじやん!」

「何をするんだい?」

「………… 考え中」

「ニヤー ニヤー (かんがえちゅー かんがえちゅー)」

旅団の誰もまだ来ないし、何か面白いことがあるかな?

そうだ! 変態のヒソカに教えてほしことがあつたよー 皆様、覚えているでしょ? あの失敗した日のことを…… 変態のヒソカならば、覗きスキルを持つてゐるはず! クロロの入浴姿をこの目で見られる日も近い!!!!

「ねえねえ、覗きッて得意でしょ?」

「………… 突然なんを言うのかな?」

「あのねえ、カクカクシカジカでしてねえーー」

「ほう………… キミって変態だね?」

「いえいえ、貴方ほどでもないですよ……」

「フフフフフ、協力しようじゃないか。 そのかわり、ボクも一緒に見てもいいかい？」

「お主も悪よのうへ ぐへへへへ」

「キミこそね？ フフフフフ？」

「ニヤんニヤ （じらないよ）」

そのころ、ホテルの一室で読書をしていたクロロの背中に悪寒が走ったそうな・・・・・・

ヒソカは？ 絶？ の巧妙な仕方を教え、プラチナはスポンジが水を吸い込むがごとく学んでいった。

ここに、変態の師弟関係が育まれ、新たな変態が誕生しそうしていた。

「キミも立派な変態だね？」

「これなら、成功するかも！…」

「そうだね？」

「ニヤ～（プラチナが～）」

修行も終わり、魔法都市マサドリでおやつのケーキを食べぬ」とにした。

紅茶を飲んでまつたりしていると、ヒソカが急に顔をあげ、ある方向を向いて笑った。

「来たみたいだね？」

「え！？ ほんとだ！」

「さあ、後をついて行くよ?」

「はーい」

「こやおー (れつづー)」

森の中に入り、シャルナークの笑い声が聞こえてきた。声による  
と、シャルナークの他に、フィンクス・シズク・パクノダ・フラン  
クリンがいることが分かる。

除念師グリード・アイランドがG・Eにいることに気付き、クロロの名前を使っている  
プレイヤーに引き渡すと話していた。

クロロの名前? もしかして・・・

プラチナは前を歩くヒソカの服の裾をひっぱって、話しかけた。

「ヒソカ、名前をクロロで登録したの?」

「そのとおり? わかりやすいだろ?」

「たしかに・・・ヒソカって賢いね」

「どういたしまして?」

プラチナと話し終えたヒソカは、訂正もふくめて、シャルナーク  
達に話しかけた。

あらわれたヒソカに、フィンクスが怒りながら話している。

フィンクス、そんなに怒つてたらハゲるんじゃ・・・

「プラチナ!! てめエ失礼なこと考えただろー!?」

「なんのことかな?」

「てめH————!! ヒソカに汚染されてんじゃねH——!!」

「プラチナ、とつあえず謝んなさい」  
「はーい・・・」「めんなさい」

「おひ」

パクノダが2人の間に入り、なかなおりをさせた。

お兄ちゃんが怒つても怖くないけど、お母さんを怒りせると怖い  
です・・・

「・・・プラチナ、何を考えてるのかしら? 触るわよ」  
「! ! 何でもないです! !」  
「にゃ~ (ばか)」

旅団との話もおわり、プラチナは再びヒンカと一緒に行動するこ  
とになった。

「プラチナ! 変態には気をつけのよ~~~~~! ! . . .

パクノダの声かけを聞いたフィンクスは、手遅れな気がする・・・  
と感じていた。

## 第26話 G・I ヒソカと蜘蛛（後書き）

2月に入つて、急に忙しくなりました。  
G・Iの最後まで頑張ります～

これからも、よろしくです。

感想などあればお願ひします～～～

## 第27話 G・I ゲームマスター？

シャルナーアク達と別れたプラチナは、ヒソカと遊ぶために次の町をを目指した。

恋愛都市アイアイに到着。

ベタベタな出会いが楽しめたけど・・・ やつぱりヒマだな～

「プラチナ、この近くに泉があるんだけど？ 泳ぎに行くかい？」  
「行く！！」

「いやー！（じぐーー。）」

プラチナはヒソカの後を付いて行き、泉に到着した。  
透き通るようなキレイなブルーの泉で、魚が泳ぐ姿が見えている。

「泳ぐぞーーー！ クーちゃんも一緒に泳ぐつーーー！」

「いやー（およぐー。）」

「フフフ、可愛いねエ？」

ペロリ？

・・・・・ロリコンだつたつけ？

プラチナはヒソカの視線を気にせず、クーと泳ぐことを楽しむ。  
泉にもぐつて魚を追いかけたり、どれだけ長くもぐれるか競争したりしてると、何か変なのが見えた。モザイクが必要なのが・・・  
何で服を全部ぬいでハダカで泳ぐかな！？ 髪の毛おろしてて力ツコトイと思うけど、下着は着たままで泳ぐでしょーよ。チラリズムがいいのにさ、丸見えじゃワクワク感がないじゃん！！

「プラチナの考えは、変態つていうんだよ？」

「知つてます！ パンツはちゃんとはいてよねーーー！」

「残念、驚く姿が見たかったのにね？」

「べへへー！」

プラチナはヒソカから離れて、クーと遊びはじめた。すると・・・誰かが飛んでくるのが見えた。

「おや、プラチナ！ めずらしいお密さんが来たよ？」

「お密さん？」

やつて来たのは、ゴン・キルア・ゴリラみたいな人・女の子だった。

「その声は、ヒソカにプラチナーーー？」

「久しぶり？」

「にゅーーー（キルアだーーー）」

プラチナと泳いでいたクーは、キルアを見つけるといそいで岸に上がり、キルアの胸に走つて飛びこんでいった。

「うわあーーー、おまえ元気にしてたか？」

「にゅうにゅーーー（げんきにしてたよーーー）」

「やつぱーいタイミング返事するよな、おまえつてさ

「ばかーーー？ 疑？ をしなさいーーー！」

「イデーーー！ 何なんだよクーに？ 疑？ しりつて・・・・・・えーーー？」

「キルアすーいよー！ クーって念字ができるんだーーー！」

「『げんきにしてたよーだつてやー… おまえスゴイなあ…』

キルアがクーを抱き上げて、『ゴンと一緒に念字を読み、もりあがつているとヒソカが話しかけた。

「何をしに来たのかな？」

「…！」

「『ずいぶん成長したね、臨戦態勢になるとよくわかるよ？ いい師に会えたようだね？ ボクが思った通り、キミ達は美味しい実つていく…・・・？』

わすがヒソカ、かなり変態だけど強いよね。

『ゴンが話しあじめた。『じうや、クロロの名前を見つけて本人かどつかなのと、何をしに来たのかを聞きに来たよつだ。』

プラチナは、ヒソカが何と答えるのかを見守るよつにした。

どりやらヒソカは、クロロを探しに来ていることと、クロロの名前にしたのは旅団に除念師の存在について教えたいで名前を借りていろと話していた。

みんなと会つたこと、内緒にするんだね… ひみつって面白い！

「それじゃ、じつちが聞く番… セツキの質問をするためだけに来たわけじゃないだろ？」「

「それだけ！」

「『じつ直接会つてきかなくてやー』

「…・・・・・」

「あの～、実はかなり強い人を探してて、私達の仲間になつて下さいませんか？」

「いいよ、ヒマだから？ プラチナはどうするんだい？」

「一緒にいく！」

「強い人を仲間にしたい理由は？」

「「えええええー！ ビスケちょっとまつてよー。」

「オレは反対だ、あいつはかなり危険だぞ！？」

ビスケと呼ばれた女の子が、キルア達を説得して、一緒に行くことになつた。理由は、レアカードゲットの為に15人仲間が必要らしい。

プラチナ達は、ヒソカに服を着せて一緒に行くことになつた。一度、恋愛都市アイアイに戻ることにした。

恋愛都市アイアイで、さらに仲間を集めるためにツェズグラという人に連絡を取ることになつた。

ゴンがヒソカに「ゴンタクト交信？」の使い方を教え、ヒソカがツェズグラに半径200m以内に会つたことがあるのか調べる。

名前があつたので、ヒソカが呪文を唱え、ゴン達が交渉をすることにした。

ツェズグラに会つて交渉することになり、移動することに。

交渉は成立。

ヒソカは、リフティングを担当することになつた。

プラチナは、ゴンと一緒にツェズグラとバレー・ボールを担当することになつた。

・・・・・なんとなるかな？

一週間後、全員一緒に？同行？でソウフラビへ向かった。

## 第27話 G・I ゲームマスター？（後書き）

シェズゲラとの交渉場面、はしょっちゃんいましたー

次は、ドッジボールをメインに書く予定です。

それでは、また読みに来てください！

## 第28話 G・I ゲームマスター？

ボクシング・ボーリング・フリースローは、順調に勝ち進むことが出来た。

今回の挑戦者を観察していたレイザーは、後は適当に負けると指示をする。15人のうち、7人の戦闘レベルに申し分ない。後はオレが遊んでやるうじやないか・・・

レイザーの指示に1人だけ従わなかつた奴がいた。ボボボという奴だ。ボボボはレイザーの指示を無視し、このくそゲームに付き合つてられるか！！！と叫ぶ。レイザーが契約違反になるぞと声をかけるが、ボボボはそれを無視し、他の仲間にレイザーを殺して一緒にこの島を船で脱出しようと声をあげた。だが、レイザーの念弾によってボボボの頭を吹き飛ばされたのだった。

レイザーはボボボの死体にむかつて、タブーを破つたら厳罰・・・殺されないとでも思つたかバカが！ とはきてた。

それを見ていた人数合わせの人達が、あんな連中とは戦いたくないわめく。ツエズゲラ達が戦わなくていいと必死に説得することができ、ボボボの不戦勝の分を人数合わせの中から選び、こちらは4勝となつた。

レイザーがボールを持つて前に出る。今から始めるのはドッジボールだ、8人メンバーを決めろと言い、レイザーは念能力で7人のメンバーを創りだした。

人数合わせの人達は死にたくないと言ひ、我先にと逃げ出して行つた。ツエズゲラは引き留めようとするが、ゴンが命がけなんだか

らオレ達だけでじょうと言ひ、レイザーに7人でいいだろと話しかけた。

「ダメだ、何のために15人仲間を集めさせたと思っている。ルールは守つてもらおう」

「ふざけるな！… お前は一人じゃないか！…」

ゴンがレイザーにくつてかかった。

元氣～～ それにしても、ゴンつてお子様だね・・・ 現実の世界だつて知らなかつたのにはビックリ！！ ツエズグラが説明しちやつたから、ヒソカが残念がつてゐる。私にはどうでもいいことだけどね。

プラチナがゴンとレイザーの話を聞いている、ゴンがジンつて名前の父親を探していることと、レイザーがジンの息子が来たら本氣で相手をする約束をしたことがわかつた。

ガチで勝負するの？ 热血つて嫌いなんだよね～ でも、あと1人メンバーが足りないんじや？

プラチナがメンバー不足をどうするのかと疑問に思つていたら、ゴリラみたいなゴレイヌが、念獸を1匹だしてドヤ顔で言つた。

「オレが2人分になる。これで大丈夫だろ」

「ああ、それじゃあ始めるとしようか・・・」

ゴリラのゴレイヌの念獸が外野にでて、他のみんながコートの中に入つていく。プラチナは自分が入るつか悩んでいた。

「どうしたんだい？ はじまるよ？」

「うーん、私ボール競技ダメなんだよね・・・ クーちゃんする？」

「にゃんにゅうな！ （ボクにぼーるはもてないでしょー）」「

「たしかに・・・」

ヒソカとクーと話していると、ゴリラのゴレイヌがやつて來た。

「君はやらないのかい？ オレの念獣ならあと一匹だせるが？」

「うーん、どうしようかな・・・」

「にゅうにゅにゅうにゅにゅ？ （ウボオーダしたらいいんじゃないの？）」

「！！！ そうだよね、クーちゃんかしこい！」

「大丈夫なのか？」

「大丈夫、すぐに変わりを出すからー。」

プラチナはコートから離れて『ヴァルキリー』を出して、まずは自分をレナス（24歳・アース神族）に設定を変更する。そして、銀翼を出して召喚をはじめた。

「死の先を逝く者たちよー！」

銀翼からでた光の粒が一ヶ所に集まり、人型を形成していく。その人型は大きく、プラチナのよく知る人物へとなつた。

「うおおおお！ 久しづりだなプラチナにクー！！！」

「ひさしづり～ 今日はね、私の代わりにドッジボールしてほしいんだけどいい？」

「ドッジボールって何だ？ どうすりやいいんだよ」

「ボールを敵に当てて、敵チームの中に入ってる人を全員当てたら勝ちなんだ。わかる？」

「おう！　あてりやいいんだな！」

「そうこうこと、ようじくね～」

「まかせろーー！」

ウボオーがコートに入つて行くのを見て、プラチナはまだ出して  
いた『ヴァルキリー』で設定をマルティーナ（23歳・魔術師）に  
変更し、コートに近づいていく。

「私の代わりに、この人がするからよろしくね～」

「かわった能力だね？　キミはやっぱり面白いよ？」

「おお！　ヒソカじやねエか、暴れようぜ！－！」

「でか・・・・・」

ゴン達にウボオーを紹介すると、大きさに驚いてます。そりゃビ  
ックリするよね？　ゴンの倍は身長差がありそんなんだもんね。  
プラチナはレイザーに近づき、質問をした。

「ねえねえ、はじめる前に体力強化してもいい？」

「かまわないよ」

「んじゃちょっと待ってね」

プラチナはゴン達に声をかけ、集まつてもらい呪文を唱えた。

「マイト・レインフォース！」

「うわわわ、すごいよプラチナ！　今のってなに！？」

「物理攻撃力が1・5倍になる呪文。　がんばってね

「うん、ありがとう！－！」

えらくゴンに感謝されちゃった・・・　ヘンな感じ・・・

「さあ、はじめようか！」

「ああーー！」

?レイザーと14人の悪魔?とのドッジボール対決がはじまつた。

第28話 G・I ゲームマスター？（後書き）

ウボオー出しちゃいました。

原作からあまりそれないようになります・・・

話を書くって難しいですね。しみじみ実感する今日この頃です。

これからも、よろしくお願ひします！――

## 第29話 G・I ゲームマスター？

ドッジボールの試合がはじまり、最初のボールはキルアのおかげでゲットすることができた。

キルアがはじいたボールをゴレイヌが受け取り、順調に相手を減らしていく。

おかしい・・・ 手加減してるのかな？

プラチナが相手の動きを見て、考えているとレイザーがゴレイヌに話しかけた。

「よーし、準備OK。お前達を倒す準備が整つたぞ」「何だと！？ やれるものならやつてもらおうじゃないか！…」

ゴレイヌはレイザーに向かって強くボールを投げたが、レイザーはボールを片手で余裕を持って受け止めた。ゴレイヌのボールは、どうやらレイザーにとつて大した事はなかつたようだ。

「さあ・・・ 反撃開始だ」

レイザーは念を込めてボールを、ゴレイヌに向けて投げた。

ゴレイヌはボールを受け止めることをあきらめ、自分と念獣の位置を交換し、レイザーのボールに当たることを避けた。念獣の頭にボールが当たると、頭が弾け飛び、念獣がコナゴナに砕け消えた。圧倒的な力の差を感じたからこそ、念獣がコナゴナに消えてしまったようだ。

跳ね返ったボールは、レイザーの手に戻つていった。

「ナイスリバウンド……なるほど、念獸と自分の位置を入れ換える能力か」

(くそ……)のまま終われるかよ……)

「コレイスが白い念獸を出し、試合を再開する。

それからは、ショズゲラが当たり、ヒソカの念能力であてて行くが、6・7が命体しボールを受け止められた。レイザーがボールを持ち、硬をしたゴンめがけてボールを勢いよく投げた。

ゴンは壁まで吹っ飛んでいき、ボールは天井にめり込んでいた。ガレキから出てきたゴンは、大丈夫だつた。だが、額から血が出ていたので、今はキルアとコレイスがパスをして手当の時間を稼いでいる。

ウボオー何もしてないじゃん……ヒソカとしゃべってないで動けよ！ せつかく出してあげたのだが、もつまつとやる……

「ハハー、そこのウボオーギン！ ちやんと動かないと、しばらくな出してあげないかんね……」  
「おいおい、そりやねよフランナ～～」「一回くらい当てる――」  
「いやんや！ （あてる！）」「当たるだつてさ？ 応援してもらひたいじゃないか？ ボクにもしてほいね？」  
「やりやいいんだろ！？ おい、ボールよこせ！ オレがする」「真面目にやれよ……」「わかつどるわ……」

キルアからボールをもらつたウボオーは、2に向かつてボールを投げた。

「あやー！」

「よし、これでいいだろ？」

「何がよしよ！ 弱いのより強いの狙いなさい、焦らされるのは嫌いなの！！」

「マジかよ・・・オレこいつの苦手なんだよなあ～」

「ブツブツ言つてないで、13狙えー————！」

「あいつ、キャラ変わつてないか？」

「面白いからいいじゃないか？」

「面白いのは、おめかだろ？ しかたねんな、ちよつと本氣を出すか」

ウボオーはゴレイヌにボールをもらい、13へと狙いを定める。

「行くぜ、オラアアア！！！ ピックパンインパクト 超破壊拳！！！？」

ドン――――――！

13はウボオーのボールを受け止めようとしたが、ボールを持ったまま後ろに吹き飛ばされていく。壁に激突して13は止まつたが、ずいぶんとメリ込んだようで外からは見えない。激突した壁には亀裂が無数にはいつており、衝撃のすさまじさを物語つていた。

「これは驚いた・・・やるね」

レイザーもウボオーの威力に驚き、ウボオーに話しかけたがウボオーはプラチナと話していた。

「ウボオー！！ すごいやん！！ やすが筋肉バカだ〜〜」

「おめか それは褒めてねえだろ！？」

「にゅうにゅうにゅ！（さすがきいんにくまんだー）」  
「オレの額に肉なんて書いてねえだろ？が！」

「書いてほしいの？」

「にゅうにゅー（にくつてかく）」

「ちがあ————う」

「ボクが書こうか？」

「ヒソカ！ てめエも入るんじやねエー！」

プラチナ達が騒いでるうちに、ゴンの手当でが終わつたようだ。

13がボールを持つたまま外野に出たので、ボールはゴンチームのものだつた。コレインヌがボールを回収し、内野のキルアにボールをパスする。

敵は、レイザーのみ。ゴンがバックを宣言して、外野から内野へ入つた。みんながゴンの動きに注目をする。

「キルア、ここに立つて。腰を落としてしつかりボールを持つてて  
ね」

「わかつた」

「最初はグー！ ジヤン！ ケン！ グー！」

ドゴー！！

レイザーはゴンからのボールを正面から受け止めてみせた。

「なーーー！」

「この程度の威力だと、取れるんだぞ？ 甘いなーー！」

レイザーは、すかさずボールを投げ返す。キルアを狙うと見せかけ、ビスケ・ウボオー・ヒソカを狙っていた。ビスケの服がかすりアウト、ウボオーは油断をして腕がかすりアウト、ヒソカは外野か

らのバスを受け止める」ことができ内野に残ることができた。

「服も体の一部つてことだわね・・・」

「油断したぜ・・・」

これでゴンチームは残るとこる、あと3人。

「ゴンは？<sup>レン</sup>練？をし、練り出したオーラを全て拳へと集めた。

「最初はグー！ ジャン！ ケン！ グー！ ジャン！ ケン！ ケン！ ジャン！ ケン！」

レイザーは、前に走り出た。そして、ゴンのすぐ近くでレシードをしボールを上にあげ、体ごと腕を引いたことで、威力を殺したようだ。

ボールが落下するまえに、ヒソカが念能力でボールを回収した。

「ダメだよ？ ボールはちゃんと取らなきゃね？」  
「そうだな」

レイザーは全ての念獣を解除し、自分へと戻した。次こそ全力で来るようだ。

ゴンはレイザーの姿に触発され、さらにオーラを出し、拳へと集めた。

「ゴンが撃つたボールは、レイザーによつてゴンに向かつて跳ね返された。ゴンは当たる寸前で気絶し、倒れこんだ。

「完璧に勝つんだろ？ ゴン？」

後ろにいたヒソカが念能力で、レイザーに向かつて跳ね返した。レイザーはもう一度返そつとしだが、ヒソカの能力によつて腕か

らボールが離れず、外野まで押し出されアウトとなつた。

勝負はゴン達の勝ち。

勝っちゃた・・・なかなかやるじやん。 ヒソカの能力欲しい  
なあ〜〜 便利だよね

レイザーが立ち上がり、ゴンに話しかけた。ジンのことについて質問に答えてくれるようだ。

第29話 G・I ゲームマスター？（後書き）

つじつまは合ひましたでしょうか？  
すれても、気にしないでください…。ごめんなさいです…。

## 最終話 G・H 除念師

「ゴンとレイザーの話も終わり、みんなでお姉さんの案内で灯台に登り？一坪の海岸線？を手に入れることができた。ゴンがオリジナルを持ち、コレイスとシェズゲラがコピーを持つことに。」

「ヒソカ、本当に何もいらないの？」

「ああ、楽しかったからね？ もう行くよ？」

「これからどうするんだ？ 一緒に行こうぜ」

「キミ達はカードを集めんだろう？ ボク達は興味が無いからね？」  
「「ンタク」何かあれば？ 交信「カンバー」？ 同行「マグネットイックフォース」？ 磁石「カンバーフォース」？ で飛んで行くよ？」

「そうこうのこと… んじゃ、元気でねー クーちゃん行くよー！」

プラチナはキルアの頭に乗っていたクーに声をかけた。ヒソカとウボオーは2人で話しながら先に進んでいく。キルアがクーを頭からおひして抱っこをしながら、お別れの挨拶をしていた。

「クー元気にしてるんだぞ？ また会おうな」

「にゅうにゅにゅ？ （けがだいじょつぶ？）」

「まーなんとかなるかな？」

「にゅうあー（ちょつとまつてー）」

クーはキルアの腕から降りると、プラチナの前に走つていいく。プラチナはクーの目線に合わせてしゃがみ、話しかけた。

「くーじつたの？」

「にゅうにゅにゅにゅう（キルアのけがなおしてちょうどいい）」

「しょうがないなあー」

「ここに…（おねがい…）」

立ちあがったプラチナは『ヴァルキリー』から『プライム・エリクサー（体力が99%回復）』を出し、クーに薬を渡してから、先にヒソカ達のとこへ行くと言つて歩いて行つた。クーは薬をくわえてキルアのとこへ戻つて行き、薬をキルアの足もとに置いて金字で話しかけた。

「ここに…（お薬飲んで）」

「ハンター試験の時、クラピカに飲ませたヤツか？ ありがとうな」「にゅうこにゅうこにゅうこにゅう（プラチナがだしてくれたんだよ）」

「クーが頼んでくれたんだ？」

「にゅ～にゅ～！（えへへ～ ちやんとのんでね…）」

「お、マジでありがとう！」

キルアが薬を飲むと、ヒドイ怪我をしていた両手があつといふ間に完治していく。クーはキルアが薬を飲んだのを見てから、プラチナのもとへと走つて行つた。

クーが急いで外に行くとプラチナは設定を元に戻して、ウボオーの肩に座り、ヒソカは？<sup>コソタクト</sup>交信？でフィンクスと話している。クーがウボオーの体を登つて、プラチナの膝に乗つた。

「おかえりクーちゃん、フィンクスが今から迎えに来るんだって」「にゅうこにゅうこにゅう（なんだ）」

「除念師が見つかったらしいぜ？ お、来たぞ」

フィンクスが飛んできて、ウボオーを見て驚いた。

「よつ、ウボオー！！　お前出てたのかよ、久しぶりだなー！」

「おう！！　おめ<sup>ヒ</sup>は元気そうだな」

「ああ。よし、それじゃ行くぞ？同行？使用！！」

飛んで行つた先には、シャルナーク達が待つていた。みんな、ウボオーがいるのに驚き再会をよろこんで話している。だけど1人だけ、ウボオーの肩から降りたプラチナに抱きついたのがいた。

「プラチナーーー！　変態<sup>ヒソカ</sup>に何もされてない？　見たところ怪我もないようで良かつたわ。マチとノブナガも心配してたわよ。顔見せに行きましょう」

「うん、楽しかったよ？　ウボオーとヒソカがね、ドッジボールしだんだ」  
「にやうにやうにやう（ヒソカがいがいとつよかつたよ～）」

「へえ～　あいつも役に立つたんだ・・・」

パクノダと手をつけないで歩いてると、マチ・ノブナガ・ヒソカ・知らない子が見えた。

ヒソカ達は、除念師について話していた。知らない子はカルトという名前で、ヒソカの抜け番なんだってさ・・・　変態の次は女装趣味！？　似合つてるからいいけど、4番つて変な人しかなければならないのかな？　旅団つてこれから大丈夫かな・・・

ヒソカは除念師と交渉に行くので、プラチナはパクノダ達と一緒に留守番することに。

動き始めたヒソカに、プラチナはキルアにあげたのと同じ薬を投

げた。

「ボクにくれるのかい？」

「試合がんばってたから、『」褒美だよ」

「ありがとう？ 指が使えないのは不自由だから、嬉しいよ？」

「いつてらつしゃーい」

「ふふふ？ またね？」

ヒソカを見送り、とりあえずみんなで『飯を食べること』。

久しぶりの手料理だ！！ パクのハンバーグ美味しいんだよ

ヒソカは交渉に成功。除念師の爆弾魔にかけられていた念も、無事に解除することができた。プラチナはヒソカと一緒にゲームを出て、除念師をクロロに会わせること。

ヒソカは、クロロと闘つのが今回の報酬だからね。ちゃんと見とかないと心配・・・こぞつていう時は？プライム・エリクサー？で全回復できるし、もしも、どっちかが死んだら、エインフェリアにすればいいだけだから大丈夫！！

ゲームを出て、除念師と待ち合わせ中。。。

クロロの除念が終わるのもあと少し、やっと復活できる。除念が終わればヒソカとの闘い。そしてその次は・・・・何があつ

ても、プラチナはクロロと一緒にいることに決めた。

神に愛されたプラチナは、『ヴァルキリー』の能力を使って自分の好きなように、神が迎えにくるまでずっと旅団のみんなと過ごしていいくのだった。

## 最終話 G・H 除念師（後書き）

最後まで読んでくださり、ありがとうございました！

G・Hで終わり、キメラアントには入らないことにしました。初めて小説を書き、たくさんの方々にお気に入り登録してもらえて嬉しかつたです。中途半端に投げ出さず、最終話まで書けたのは皆様のおかげです！

番外編も書こうかと思っています。

時間をつくりて、次回作にも挑戦しますので、よろしくおねがいします～

ありがとうございました

番外編 蜘蛛と桃の節句（前書き）

お久しぶりです。

お雛様を飾つていて、思いついたので書きました。

## 番外編 蜘蛛と桃の節句

プラチナがハンター試験を受ける前のこと。

旅団<sup>クモ</sup>は、全員で日本へ行くことに。今回の目的は、江戸時代から伝わるという？不死者の巻物？を奪取することだ。情報収集は、パクノダ・シャルナーク・フェイタンが行つた。

巻物は、城の奥に隠されていることが分かつた。プラチナが警備員の場所を調べ、クロロガ指示を出すことで、スムーズに終わることができた。警備員の中には、根性のある奴もいたがウボオーの力比べにはかなわなかつたようだ。

目的は果たしたので、アジトに戻り打ち上げをすること。  
酒を飲み、ご飯を食べ、好きなように盛り上がるなか、シャルナークが全員に聞こえるよう大きな声を出した。

「はいはーい、今から？桃の節句？をはじめます！」  
「なんだそりや？」

ノブナガが質問をすると、日本で情報収集をしたときに知つた？桃の節句？について簡単に話した。女の子のお祭りで、雛人形を飾つて、甘酒を飲んで、雛あられを食べる。

シャルナークは説明しながら、甘酒をコップにつぎ、全員に渡していく。

「女の子の大祭なお祭りらしいから、プラチナのために雛人形も用意したわよ？」

「あられもあるね」

パクノダが豪華な雛人形を出し、フヨイタンがあられをプラチナに渡した。

あられを受け取ったプラチナは驚き、甘酒を持つて固まっている。

「みんな甘酒あるよね？ それじゃ、プラチナが素敵な女性になりますように！ 乾杯！！」

「――乾杯！！」

あられをガリガリ食べながら、プラチナは甘酒を飲む。

ヒソカが隣で、甘酒がなくなつたらついでくれる。5杯目を飲んだころには、プラチナの目はトロンとして、顔もほんのり赤くなつていた。

「大丈夫かい？」

「うへへへ、げへへへ・・・」

「う～ん？ 危ないね、もうダメだよ？」

「あい・・・ ヒシヨカ？」

「なんだい？」

ヒソカは、プラチナが酔つたのを感じ、甘酒を勧めるのをやめる。プラチナが呼ぶので、近寄り顔を覗きこんだら・・・

ガブリ！――

「うぎや？？！」

「ガジガジ～～～

「プラチナ！！ ヒソカなんか かじつたらお腹壊すよ？！」

「そういう問題か？」

シャルナークは、クロロにつつこまれながら、ヒソカからプラチナをはがし、抱きかかえフェイタン達のところへ移動する。かじる物がなくなつたプラチナは、シャルナークの服をかじつていた。そんなプラチナに、ウボオーが話しかけた。

シャルナーカは半裸の状態になりながら、服を剥いでくるプラチナを横でマイペースに酒を飲んでいるフェイタンの膝に投げ渡した。変な声をあげながらフェイタンの膝に座ったプラチナは、驚くフェイタンの顔から順に下までマジマジと見つめる。

「なに?」  
「ぼーぐびつこ。」  
「!」  
「ああ～～～！」  
「わあ～～～！」  
「？」

暴言を吐いたプラチナを、フェイタンは投げ飛ばした。

「ゴンーー

クロロの前に、頭から着地する。

頭を抱えて悶えるプラチナに、クロロは呆れて声をかけた。

「プラチナ、言つて良い事と悪い事があるんだぞ」

「ううう～～

クロロはプラチナを抱えて、背中をトントンしながら話す。

「ほら、フライタンに謝れ

「あい、ごめんなさい・・・」

「・・・次は許さないね」

「もうしましまん！」

「気を付けるよ。わあ、もう寝ろ」

プラチナの目はだんだんと閉じられてこそ、やがて寝息が聞こえ  
てきた。

「かわいいね？」

「ヒソカ、静かにしろ」

「はこはい？」

プラチナがクロロの膝で丸まつて眠り、起きないと感じると旅団  
たちは酒を飲みはじめた。  
じきやかな雰囲気で飲んでいると、プラチナがゴソゴソと動いた。

「うひや～～

「寝てろよ」

「んん・・・・ フランクフルト～～

「！？ ヒソカお前だろ・・・ プラチナに変な事を教えるんじゃ  
ない」

「へへへへ？ 面白こじやないか？」

「うひじて、ドタバタしつつも、桃の節句？は終わった。

番外編 蜘蛛と桃の節句（後書き）

今日でブーちゃんは卒業です。

頑張つて働いて、息抜きに小説を書きます。

これからも、よろしくです。

誤字があれば、教えてください。

## お知らせ

皆さま、お久しぶりで「」やります。  
お知らせで～す。

ハンターハンターの番外編を考えているうちに、幽遊白書の2次小説を書きたくなつてきました。  
挑戦する事にしました！

思いつきり見切り発車！？ かもしませんが、よければ読みに来てくださいです。

今回は、ヴァルキリーのキャラを召喚するのではなく、初期の旅団メンバー + ヒソカを召喚できる事にしています。「ゴンとかはでてきません。

なおかつ、プラチナは幽助の双子の妹になり、なまえが雪姫となつています。

幽白とハンターのコラボ番外編も書けたらな～ と考えています。

やりたいことたくさん。

いっぱい挑戦していくますので、よろしくお願いします

今のところ、原作を大切にしようと考えています。

予定は未定という事で・・・

ではでは～

ハンターハンターの番外編も合間に投稿しようと計画中、お待ちください！

番外編 お花見 ?（前書き）

お久しぶりです( )

さくら　ひら～ひら風に舞い降りて  
揺れる　思いのだけを抱き寄せた～

最近のプラチナは、『機嫌な様子で歌をよくうたつ』ている。

日本に仕事で行つたときに聞いた歌が、頭からはなれないようだ。そんなプラチナを様子を見たマチが、パクノダにある計画を相談する。2人はプラチナを驚かすために、他の団員にも協力を要請し、プラチナに気付かないように水面下で準備をはじめた。

マチとパクノダが考えた計画は、プラチナがよくうたつている歌詞にある桜でお花見をすること。仕事があつた時の日本は、？お花見？という宴会をする季節だったので、よく桜が咲いている下で宴会をしている日本人を見かけた。プラチナがそんな盛り上がる日本人達を羨ましそうに見ていたのをマチは覚えていたのだ。マチとパクノダは計画を実行するにあたり、具体的に内容を練つていく。自分たちでは実現するにしても限界を感じ、団長に相談することに。

「団長、出来そう？」

「・・・無理ではない。ただし、全員の協力が必要だな。」

「それなら大丈夫よ。プラチナの為なら、協力してくれるって言ってたわ」

「どうか。ウボオーとノブナガは宴会に魅かれたんじゃないのか？」

「ビンゴー！」

「それでは、準備を始めようか。皆を集めているのだから～」  
「ああ、団長頼むよ」

クロロを先頭に、マチとパクノダは団員達が集まる部屋へと移動する。

部屋に集まっていた団員へクロロは計画に必要な物を、誰が何を準備するのか指示をしていく。それを聞いた団員達は、行動を開始しました。

団長の指示で、会場の準備をまかせられたのは、ウボオーとノブナガだ。

2人はホームの近くにある森にやつて来ていた。

「おい、さつさ終わらしそうぜ」

「おう！！ いやぞ、ハアアアアアアア――――――アアアアア！」

「！」

ドゴゴオオオオオオ――――オオオオオオソンソン――――！

「ヒュ～、相変わらずの威力だな」

ノブナガは、ウボオーがビックバンインパクトでつくつた大穴を見下ろして感想を言つていると、穴の中心にいるウボオーが話しかけた。

「おい！！ サツサと終わらすんだろーが、お前も働け！！」

「わかつてゐつつーの！！」

穴の中に飛び降りたノブナガは、斜面に向かつて立ち愛刀を抜刀し、一閃する。すると、斜面が崩れ階段ができていた。

「こんなもんだろ」

「てめえ、器用だな〜〜」

「さつさと帰るぞ、団長に報告だ」

「おう！」

会場ができたその頃、マチとパクノダは宴会で食べる料理を調達し、フランクリンとシャルナークは飲み物の準備をし、フェイタンとフィンクスは日本から畳を盗つてきていた。桜の準備はクロロとコルトピがしていた。取り寄せた桜の木を会場に運び、クロロが指示した場所にコルトピがコピーをしていく。こうして、ウボオーとノブナガが準備した会場は、桜の木でいっぱいになり、中央にフェイタン達が盗つてきた畳を敷いていく。フランクリンが酒を運び、マチとパクノダが料理を運び、シャルナークが桜を照らすライトを設置したことすべての準備が完成した。

団員が忙しく準備をしている間、プラチナは何処にいたのかといふと・・・

「ねえねえ、イルミつて今は家にいるかな？」

「うん？ どうしてだい？」

「クロロにね、手紙を渡してほしつて言われたんだ

「なんだ、ちょっと聞いてみるよ？」

「ありがと」

クロロにお使いを頼まれていた。

「もしもし？ プラチナがキミに会いたいんだってさ？」

「・・・間違つてないけど」

「ふうん、そななんだ。じゃあ、キミの家でまつてると、また後でね？」

「イルミのお家に行くの？」

「そういうこと？ ジャア、行こいつか？」

「ヒソカもくるの？！」

「もちろん？」

「一人でいけるもん！」

「ふふふ？ ダーメ？」

「つきやつづ」

「出発だね？」

1人で行こうとしたプラチナは、ヒソカの念能力につかまり、一緒にイルミの家に行くことになった。

旅団所有の飛行船に乗つて、ゾルディック家に直接到着。飛行船から降りたプラチナとヒソカを、執事のゴトードゼノにシルバが出迎えた。

「久しぶりじゃの、元気にしておつたか？」

「うん！ ゼノおじーちゃんも元気に殺つてた？」

「もちろんんじや、最近は骨のある奴があらんでの、汗もかかんわ

「へえ～、そななんだ」

「親父、立ち話もなんだ、中へ入るわ」

「そなじやの、付いてこい」

「は～い」

「？」

中に入ったプラチナ達は、イルミが戻ってくるまでの間、一緒にゾルディック特製（毒入り）のお茶を飲んだり特製（毒入り）ケーキを食べたりしていた。

お茶を飲んでいたゼノが、いつもプラチナと一緒にいた黒猫がないことに気付き話題にした。

「黒猫はどうしたんじゃ？」

「そういえばそうだね？」

「クーちゃんはね、最近恋人？　ができたんだよね・・・」

「さびしいの？」

「うん・・・」

プラチナのテンションが下がったことで、雰囲気が暗くなつたその時、部屋の扉をノックする音が聞こえてきた。

「なんじゃ、入れ」

「失礼いたします。　イルミ様がお戻りになられました」

「帰ってきたの？」

「はい、ただ今こちらに向かつておられます」

「迎えに行く〜！〜」

プラチナは玄関までイルミを迎えて行き、クロロから頼まれた手紙を忘れないうちに渡した。イルミが手紙を受け取り、内容を読むとそこに書いてあったのは・・・

「ふーん」

「?　なんて書いてあつたの??」

「招待状」

「招待状？」

「知らないんだ？」

「？？？」

「なるほどね？」

「どれどれ、ほつそうこう」とか

「手土産を用意しておけ」

「承知いたしました」

「ううして、プラチナの知らない間に？お花見？に参加するメンバーが賑やかになっていく。

「そろそろ帰るうか？」

「？？？ うん・・・」

「いくよ」

イルミ、ゼノ、シルバ、ゴトーを連れて、プラチナとヒソカはホームに戻つていった。

もうすぐホームに着くとき、ヒソカがクロロに電話をした。

「もしもしし、ボクだけど？」

『着いたか』

「ピンポーン、おまけが4人付いてくるよ?』

『問題ない・・・ プラチナに変われ』

『はいはい？ プラチナ、クロロだよ』

「もしもしし？」

『いやー』

「クーちゃん！？』

『戻つて来ているぞ。今はホームではなく外にいる。場所はヒ

ソカが知っている『

「うん、わかつた」

「それじゃ、こっちだよ？』

イルミ達を連れたプラチナは、ヒソカに案内されて会場に到着した。

そこは、何十本もの桜がライトアップされ、とてもきれいな景色がひろがっていた。

「――――――

驚き、喜ぶプラチナを見た団員達は、計画が成功したことを喜び宴会をはじめることにした。

『乾杯！――――――

番外編　お花見　?（後書き）

思いのほか、長くなつたので途中で区切りました。  
次回は、宴会のよつすを書く予定です。

頑張ります！

週末しか書けない状態ですので、気長にお待ちくださいませ～

はじめましてかのう?

「ワシはゼノじゅ。長生きはするもんじゅよ、旅団と宴会をする日  
が来るとはのう。

これもプラチナのおかげじゅな、カワイイ奴じゅよ。

宴会がはじまり、プラチナは花より団子になつているよ。ゼノ  
まだまだ子供だから仕方がないのかもしけんのう。

ゼノが?さくら?を見ながら日本酒なるものを飲んでいると、ク  
ロロが酒を片手に近づき声をかけた。

「じ老体、飲んでおられますか」  
「心配せんでも、飲んどるわい」  
「そうですか」  
「今日はワシらも参加してよかつたのか?」  
「あいつは、大勢の集まつて食べるのが好きですから」  
「そうか」  
「ええ」

2人が飲みはじめるとき、シルバがゼノの様子を見にきた。

「親父、飲みすぎるなよ」  
「ふん、年寄り扱いをするんじゅない。　まだまだ、大丈夫じゅ」  
「飲みますか?」  
「もうおう」  
「ほれ、ここに座るんじゅな」

3人が一緒に飲む姿をプラチナとクーが見ていた。

クーは彼女に振られたようで、プラチナにひつつきツナサラダを食べている。プラチナは、そんな甘えてくるクーを撫でながらピザ・パスタ・唐揚げ・ポテト・3色団子を食べていた。

「クーちゃん、あの3人組が暴れたら大変だね～」

「にゃーにゅう（にぎやかになるねー）」

「プラチナ、ジュースのおかわりいるかい？」

「いるー、オレンジジュースがいい」

「はい？」

「・・・ヒソカ変なの入れてないでしちゃうね」

「毒なんか入れてないよ？」

マチがプラチナのコップに入っていたジュースが無くなつたので、声をかけているとヒソカがやつて来てタイミングよくオレンジジュースを持ってきた。マチはヒソカがジュースの中に何か入れているのではないかと疑い、クーに毒が入つていなか確認してもらうことにした。

「クー、毒は入つてないか？」

「クンクンにゅう（毒は入つてないよー）」

「そうかい、ありがとう」

「飲んでいいの？」

「ああ、いいよ」

「やつた～」

「？」

ゴクゴクゴク・・・ふは〜

・・・・・ひっく

・・・ひっく ひっく

オレンジジュースを飲んだプラチナの顔が赤らみ、しゃっくりを  
はじめた。

田がトロンとし、ボーッとしている。クーが呼びかけるが、返事  
をせずにへラへラと笑っている。

・・・誰だ、プラチナに酒を飲ませたのは。

いち早く変化に気が付いたクロロは、プラチナが暴走する前に避  
難をすることにした。

「」老体、場所を移しましょうか

「ふむ、プラチナが原因かのう？」

「確かに、さつきから様子が可笑しいが

「ええ、あいつは酔うと危ないので先に避難をしましょ

う「そうじやの、高みの高みの見物でもしようかのう」

「親父・・・」

3人がコツソリと移動を開始した時、プラチナの田があや  
しく光った。

キラン?

うつすらと笑みを浮かべたプラチナが立ち上がり、動きはじめた。  
クーはもう自分ではプラチナの行動を止める事はできないと感じ、

クロロの元へと避難していく。

(みんな がんばるこやーー)

初めのターゲットは、ほそマツチヨで金髪なあの人。  
滑らかに？絶？をして、背後から忍び寄るハンターなプラチナは  
狙いを定めて襲いかかつた。

「さやつ、もうなんだよプラチナ、ビックリするじゃないか！」

「クンクン クンクン」

「・・・ 何、どうしたの？」

「シャル ええ匂いするねえ～

「え、！？」

「んふふ～～ ガブッ」

「ちょっと やめろって いってえ――――

「抜けたー んにや～」

「はつ、この匂い！！ 誰だよプラチナにお酒飲ませたのは――――」

アレはもうダメね、ワタシ避難するね

プラチナの餌食となつているシャルナークを見捨て、フュイタン  
はコツソリと高みの見物をしている団長の近くへと避難していった。  
哀れシャルナークは、頭に十円禿が出来たころにやっと解放される。

戦利品である、シャルナークの髪を持つたゞ機嫌な様子のプラチ  
ナ。

キラリ？

あやしい笑みを浮かべるプラチナの餌食にならないよう、前回の惨劇を覚えている団員達は避難していく。そんな中、ヒソカの話を聞いていてプラチナから背中を向け、騒ぎに気が付いていないのが一人いた。黒髪が素敵な、あの入だ。

ふふふ？ 上手い事いったみたいだね

後は、近づいてくるプラチナをイルミに気付かれないようにしていいとね？

「ヒソカ 話の続きを？」

「？」

「どうしたの？」

「後ろ？」

「？」

ヒソカに言われて後ろを振り向くと、プラチナが微笑みながら立つていた。

？？？ 意味が分かない

プラチナに声をかけようとしたらその時、プラチナが俺の髪を触ってきた

撫で撫で サラサラ～

プラチナがイルミを餌食にしようとしたその時、2人の間に割つて入った人物がいた。

背後から近づいていたのは、ゾルディック家の執事のゴトーだつ

た。

「これは危ない予感がします。イルミ様をお守りせねば……」

「プラチナ様、もう遅いですし寝ませんか?」

「うにゃー? もう寝るの?」

「そうですよ、眠くないですか」

「うん・・・ねる~」

「そうしましょう!」

「う~ ノノノ ノノノ

おお~~~!!~

さすがはゾルディック家の執事。

暴走しはじめていたプラチナを、抱っこするとものの2分もしないうちに、寝かしつけてしまった。

「残念?」

「・・・?」

ヒソカはイルミを驚かそうとしたが、ゴトーに計画を狂わされ、成功しなかったことを残念に思っていた。そんなヒソカや、プラチナを抱っこして寝かしつけているゴトーを見ても、何があったのかよく分かつてない鈍感なイルミが一人不思議そうな顔をして、酒を飲む。

高みの見物をしていた3人は、物足りなく思いながらも、酒を飲むことに。クロロはゴトーからプラチナを受け取り、自身のコートにぐるんで膝枕をし、寝かせる。

じつして、静かになつたプラチナに安心し、宴会せんぱいおもなく盛り上がりつていいくのでした。

おしまいー

次の日、一日酔いに頭を抱えるプラチナの姿が見られましたとさ

番外編　お花見　？（後書き）

ぐだぐだ感が、すさまじいです。

更新が遅くなつたのに、こんなのですみません！！

しかも、もう桜が葉桜になつてるし・・・

次回の番外編は、海をテーマにしようかなあ～と考え中です。

それでは、誤字脱字があればご指摘お願い致します！

これからもよろしくです～

## 番外編　七夕？！

ノブちゃんが変な植物を引きずつて帰つて来ました。

「おい、プラチナ！ もうすぐ七夕だからな、願い事をこの紙に書いて、この笹の葉に飾ると願いがかなうぞ！」

「？？　願い事？ 七夕だから願いがかなう？　なにそれ・・・」

ノブナガの説明に困惑していると、ちょうどホームにいた団員が集まってきた。

「何だ何だ？！」

「桃の節句に続いて七夕つてものジャポンのお祭り？」

「書いたらかなうね、誰がかなえるのか不思議ね」

「織り姫？ 彦星？ だかそんな奴らだったよウナ・・・」

「？？？ 誰それ」

上から順番に、フィンクス・マチ・フェイタン・ノブナガ・プラチナが話している。

「団長なら詳しく述べるんじゃない？」

パクノダの提案により、みんなの視線が1人読書に励んでいた団長に集まつた。

「クロロ、七夕って知ってる？」

プラチナが聞くと、クロロは面倒くせに一冊の本を取り出し、近くにいたパクノダに投げ渡した。

「七夕について書いてあるやつだ、読めばわかる」

そう言って、自分は読書にもどった。

そんな本まで持つてたんだ・・・

とりあえず、自分で読むのはめんどくさいから、パクに読んでもらおうと。

「パク読んで」

「そうね、みんなはどうあるの?」

プラチナ以外のメンバーに聞くと、意外と?七夕?という祭り?が気になるのか笠を壁に立てかけ、話を聞く態勢をとった。

プラチナは、パクの膝に乗せてもらい、一緒に本を見ながら読んでもらうことにしてしまった。

『七夕』～本当は怖い話～

むかしむかし、あるといひに織り姫といつ それは可憐なじいお姫様がいました。

織り姫は自分の可愛い容姿を利用して、働く好きな事ばかりして過ごしていました。

父親は織り姫を溺愛しており、働くよりは言わず自分から率先して甘やかしていました。

すると、母親はそんな2人に呆れて、家を出て行ってしまいます。

一家の稼ぎ頭は母親だったので、さあ大変です。

あつといつ間に、贅沢をするためのお金が、底をついてしまったのです。

このままで織り姫を甘やかす事ができないと考えた父親は、お金を持つている人から貰つことにしました。

貰い方は簡単。 お金持ちの家を訪ね、自白剤の入ったワインを貰うぞうします。

薬が効いてきたところで、お金や貴金属を保管している場所を聞き出し、回収した後は持ち主を殺してから家に帰ります。 もちろん屋敷の使用人も全員始末をし、屋敷全てを燃やし証拠は何一つ残さないようになりました。

何件かやるうちに、父親は強くなつていきました。

今日もひと仕事を終えて、プレゼントを持って家に帰つてくると、織り姫の部屋から若い男の声が聞こえてきたのです。

「彦星もうだめだわ、お父様が帰つてくるもの

「織り姫、そんな切ない事を言わないでくれよ。 夜はこれからだろ?」

織り姫の艶めいた声を聞いた気がした父親は、部屋に突入したのです。

「織り姫！！　コレは一体どうしたことだ！！」

彦星は驚き、織り姫から離れました。

織り姫は、父親の剣幕に驚きながらも嬉しそうに声をかけました。

「お父様、いいところに来て下さいました？」

「どういふことだ？」

「7月7日、今日は私の誕生日？　ぜひともやつてみたい事があつたのですけど、私ひとりでは無理でした。だから、お父様をお待ちしていました？」

織り姫は、腰が抜けて動けない彦星を残して、父親の元に行き耳元で囁きました。

話を聞いた父親は、とたんに機嫌を直し、微笑みながら彦星に近づいたのです。

「な、な、なんですか！　わああっ！」

彦星は大した抵抗もできずに壁に押し付けられ、両手足を壁に隠してあつた皮の拘束具で動きを封じられたのです。

織り姫はナイフを片手に、機嫌良く彦星の服を切り裂いていきました。

「お、織り姫?！」

彦星が顔を真っ青にしながら、自分にじつうりとほほ笑む織り姫に、どうしたことなのか説明を求めました。

すると、織り姫は机からいろいろな道具を取り出し、そのうちの一つを持つて彦星に近づきながら話し始めました。

「私ね、一度試してみたい事があったの。 女の人で試した事があつたのだけど、男の人はまだ試した事が無いのよ？ それと、後始末が大変だからお父様にはもうダメって言われてたの。でも、どうしても試してみたくてね？ 誕生日プレゼントの代わりに今日は特別に許してもらえたわ？」

困惑する彦星に、織り姫の父親が話しかけました。

「君も運が悪かったと諦めるんだね」

「さあ、楽しませてね？ 痛くなつように麻酔をちゃんとしてあげるから?？」

その後、織り姫の部屋からは若い男性の声が響いてきました。

それを聞いた住人は、またあの家かと怯え、戸締りをしつかりとして何も聞こえなかつたと思い込むようにして、その日の事を記憶から消してしまいました。

数日後、誰かもわからない若い男性の無残な遺体が山奥で発見されたそうな。

男性の遺体は、腹が捌かれて引きずり出された内臓を首にリボン結びをされていたり、刃物での切り傷、焼け爛れた右腕、骨がむき出しになっている左腕、ノコギリの様な物で切断された両手首に足首、顔には無数の様々な形の針、お尻の肉は削ぎ落とされ、乳首は噛み切られた跡があつたそうな……

7月7日は、ある女の子の誕生日で、笛に願いを書いて飾ると、まれに願いがかなうようだ。しかし願いをかなえてもらうためには、若い男性の生贊が必要であり、また、女の子とその父親が納得する美しさを兼ね備えていなければならないそつた。

願いをかなえたいあなた、準備は大丈夫でしょうか。

間違えるとあなたが生贊となり、願いをかなえる事はできないでしょ。

おわり

…………やだ、何この話 呪われそうなんですけど。

「いいね、でも、もうすこし詳しく書いてほしかたね」  
「ノブナガ、なにをプラチナにさせようとしてるんだい？」

「え、？！ ちょっと、俺が知ってるのほんなんじやねーそ？！」  
「お祭りでは無かつたわね・・・」

しかし、七夕はプラチナの育上よくないといつ事で中止となり、  
ホームの屋上からは簾巻きにされたノブナガがぶら下げられた。

コレ以降、無暗やたらにジャポンのお祭り？ をする」とは無く、  
事前にシャルナークが調べパクノダが〇〇を出したものだけを、  
するようになります。

おしまい。

番外編 七夕？！（後書き）

七夕が好きな方、すみませんでしたああ――

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8798p/>

---

白銀の女神にごちゅうい！

2011年7月5日18時14分発行